

神機使いだって人である

アルバード

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アラガミという恐怖が蔓延る殺伐とした世界。そんな中で二人の主人公は出会う…
ストーリー終了後のバーストとレイジバーストの主人公が織りなす非日常の中の日常物語です。

なお注意事項として、拙い文章力、こいつは小説をわかっていない（重要）、残念な思考回路等々。一向に構わん！という方は暖かい眼差しで見守ってあげてください
レゾナントオプスキヤラ追加し新編開始しました

目次

アリサ・シエルート	
プロローグ	1
第1話 ただいま おかえり はじ	
めまして	8
第2話 監視と事故	20
第3話 俺の必殺技	33
クリスマス特別編	
4年の白紙	
100年の約束	50
正月特別編 明けましておめでとうご	
ざい…	69
第4話 血縁がトラウマ連れてやって	
くる	77
第5話 お兄ちゃんだけど愛さえあれ	
ばry	86
バレンタイン特別編	95
第6話 血の覚醒(仮)	105
ホワイトデー特別編	118
第7話 想い合い	127
第8話 恋人の時間	141
夏の特別編	147
エリナルート	
エリナ編 第1話	153
第2話	158
第3話 泣きつ面に蹴り	164
ハロウィン特別編	187

第4話 欲しいもの

だ！

210

クリスマス特別編2

アリスの誕生日

250

正月帰投編

エリナ 誕生日

286

神機編

タワー・ショート・アサルト

302

聖バレンタイン編

321

復讐のホワイトデー編

342

新作…だと!?

368

エリナ編 第5話 平和な時間

383

今後について

391

新旧ごった煮編

プロローグ新編始動、本部に殴り込み

432 427 401

アリサ・シエルト プロローグ

ある日のこと、極東支部のブラッド隊長とクレイドルの面々が支部長室に呼び出された

スバル「呼び出しって、何だろうね？」

コウタ「やっぱり重要な話じゃないかな」

アリサ「どうでしょうか、昔リーダーがやってた素材集めとかですかね」

コウタ「うわ、それ勘弁だわ。あの人涼しい顔してエグい量頼んでたからな」

ソーマ「あいつはそれを当たり前のようにこなしてたな…」

スバル「あはは…まあ大事じゃない事を期待して、失礼します」

支部長室に入るとそこには支部長のペイラー・サカキともう一人、独立支援部隊クレイドルの雨宮リンドウの姿があつた

コウタ「あれ、リンドウさんも呼ばれてたんすか」

リンドウ「よお、お前ら。ブラッド隊長殿もいるな。んで、俺らを集めた理由つてのは何ですかねサカキ支部長」

サカキ「ふむ、実は君達に一つ知らせがあるんだ」

スバル「…！」

サカキ「身構えなくても大丈夫だよ、明日彼が帰ってくるだけだから」

コウタ「なーんだ、あいつが帰ってくるだ…け？」

スバル「…誰？」

サカキ「君は会うのは初めてになるかな。コウタ君の前任、つまり元第一部隊の隊長だね。何度か噂や話は聞いているんじゃないかな」

スバル「ええと確か…四年前のエイジス事件での解決に大きく貢献していて、今はクレイドルの任務であちこちに飛んでる人ですよ」

サカキ「そう、その彼が実に三年ぶりになるかな。この極東支部に帰ってくると一報があったんだ」

アリサ「長かったですね…」

ソーマ「また騒がしくなるのか…」

コウタ「お前ら、すごーい嬉しそうな顔してんなあ」

ソーマ「あ？」

アリサ「コウタこそ顔が緩んでるんじゃないんですか!？」

コウタ「そりゃ嬉しいよ！そうだ、ちよつとしたパーティーでも開こうぜ！ブラッド

の皆も紹介したいしき」

スバル「でも、明日って随分急ですね」

コウタ「思い立ったが行動、すぐに準備しようぜ！」

こうして、コウタさんを中心として元第一部隊隊長の帰投を祝うサプライズパーティーの準備が始まった

おまけ

ブラッド区画の部屋にて

ロミオ「結局さ、元第一部隊の隊長さんってどんな人なんだろう？」

スバル「この瞬間を待っていたんだー！」

ナナ「うわっ、びっくりした。どしたの急に」

スバル「そんな疑問が出るかと思いき前に聞き込みしてきました」

ギルバート「やけにテンション高いな…」

スバル「そうかな？まあ、それは置いて。現在21歳、黒を好む、常時サンングラス着用、被弾数は支部トップ、面倒くさがり屋、人の話を聞かない等々」

リヴィ「後半碌なものなかったんだが」

スバル「どう思われてるんだかわからないね、ただ…」

シエル「ただ？」

スバル「最後には皆『会えばわかる』って言うんだよね」

ジュリウス「それならば、どんな人物かは明日わかるだろう」

スバル「それもそうだね」

第1話 　　ただいま 　　おかえり 　　はじめまして

多くの料理が並べられたラウンジで第一部隊、防衛班、ブラッド隊、オペレーターやその他のサポーターの面々が祝いの席についた

クレイドルのアルバード、数年ぶりの帰還を祝う席なのである

コウタ「あーテストス：よし。えー、皆様お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。では、今回の主役からのご挨拶です、はいマイク」

アルバード「俺こういうの苦手なんだが…」

コウタ「まあまあ、いつも通りでからさ」

アルバード「ええと、あー…ご紹介は、預かってないか預けるよ。クレイドル所属のアルバードだ。お初にお目にかかる人は初めまして、後は…ただいま、以上」

会場の全員から惜しみのない拍手

コウタ「おかえり、アル。続きましては、サプライズゲストの登場です！ユノさん、どうぞ！」

ユノ「皆さんお久しぶりです。アルバードさん、はじめまして」

アルバード「あ、ご丁寧にどうも」

ユノ「えっと、その…今回も挨拶代わりと言っては何ですが」

コウタ「はいはい、今回も待ってましたとも！何人が気付いてたみたいだけどセツトとかすでにしてもらってまーす！」

温かな拍手がラウンジに響く

曲は割愛

再び拍手の音が響く

コウタ「ユノさん、ありがとうございました。では、宴の幕引きまでご歓談をお楽しみください」

アルバード「なかなか板についてたじゃねえか、お前こういの結構向いてんだな」

コウタ「まあ、あれも二回目だしな」

アリサ「リーダー！」

アルバード「よお、久しぶりだな。背、伸びたか？」

アリサ「三年も経ってますから…」

アルバード「三年か、ソウマにリンドウさんも久しぶり」

ソウマ「長く空けすぎだ」

アルバード「わりいな」

リンドウ「見ないうちにいい面構えになったんじゃないか？」

アルバード「リンドウの背中くらいは守ってみせますよ」

リンドウ「はははっ、そいつは頼もしいな」

エリナ「あの、コウタ隊長」

コウタ「ん、どうした？」

エリナ「この人が隊長がよく言ってた前の隊長？」

コウタ「そっか、まだ会ったこと無かったんだよな」

アルバード「コウタが隊長とか、プハッ！」

コウタ「ちよ、笑うなって」

エリナ（あれ、このサングラスどこかで見たような）

アルバード（そーい、前にあんな帽子を見たよな）

エリナ「初めまして。エリナ・デア・フォーゲルヴァイデです」

アルバード「ん？エリナ…って、そっかあの時の嬢ちゃんか！」

エリナ「思い出した、四年前に会ったおじさん！」

アルバード「相変わらず小っちゃいな、嬢ちゃん」

エリナ「ちっちゃくないよ！」

アルバード「ははは、ところでもう一人いるんじゃないか？」

コウタ「あー…その、あれだ。気を張つとけ」

アルバード「お…おう？」

エミール「お初にお目に掛かる！」

アルバード「うおう!？」

エミール「おつと、失礼。少々驚かせてしまったようだ。僕はエミール、栄えある極東第一部隊所属エミール・フォン・シュトラスブルク！」

アルバード「…」

エミール「友好の意を込めて紅茶を振舞わせてもらおう、レモンかミルクはいり
ますか？」

アルバード「(紅茶は) いらなです」

エミール「いらな？ つまり…ストレートか！」

アルバード「コウタ、ブラッドのどこ行ってくる (小声)」

コウタ「わかつた」

エミール「余計のものは入れずにありのままで行く、そういうことだろうか！…おや、
アルバード殿は何処へ？」

アルバード「ふう、強烈な隊員持ったなコウタのやつ」

場所は移りブラッドのところへ

アルバード「さて、改めましてブラッド諸君。アルバードだ、留守の間ダチが世話になった」

スバル「いえ、こちらこそ。ブラッドの隊長スバルです」

アルバード「俺の神機の長期メンテが終わったら世話になるかもしれないからさ、そんな時はよろしくな」

スバル「はい、よろしくお願ひします！」

アルバード「緊張してないか？」

スバル「…少し」

アルバード「ははは、もっと楽にいきましょう」

コウタ「さて、そろそろお開きの時間ですがその前にリツカさんから話があるそう
です」

リツカ「みんなにお願いがあるんだけど、彼の神機の長期メンテの間見張って欲しいんだ」

スバル「見張る？」

リツカ「特に神機の保管庫には絶対に入れないで欲しいんだ」

アルバード「えー」

リツカ「なんなら監禁でも良いんだよ？」

アルバード「大人しくしてます」

リツカ「じゃあ、よろしくね」

アルバード「んで、誰が残るよ」

t o b e c o n t i n u e d ∴

第2話 監視と事故

宴が終わった後、アルバードの監視にはブラッドのスバルがつくことになった

理由は3つ

ひとつはスバルの実力を評価したもの

もうひとつはリツカからの強い要望

そして最後にアルバードの帰還の理由でもあるブラッドアーツの習得だ

スバルの『喚起』の血の力の影響を受けさせる為に手始めに親睦を深めることが二人への任務となった

なお、アルバードには神機保管庫への入室は禁止されているが模擬神機や訓練室の使用は許可されている

して場所は訓練室、現在二人は…

アルバード「はあああ！」

スバル「でりやあああ！」

なぜかダミーアラガミを用いたシミュレートではなく対人戦をやっていた

アルバード「あー、やっぱ強いな」

殺風景な訓練室の床に倒れるように寝転ぶ

アルバード「あ、床めっちゃ気持ちいい…」

スバル「あの、聞いてもいいですか？」

アルバード「タメでいーよ。んで何？」

スバル「なんで神機保管庫だけは出禁くらってるんですか」

アルバード「あー、それか。話せば長いんだが…」

四年前のこと、リンドウさんの神機を使用した事とその経緯、リンドウさんの腕の事を大まかに話す

混乱を避けるため神機の人格、レンについては少しぼかして伝えた

スバル「そうだったんですか…」

アルバード「ま、今生きてんだから結果オーライって奴だよ」

スバル「だから厳戒態勢敷いてるんですね」

アルバード「ただの派遣員に隊長格つけなくてもいいのにさ、あー…あだつ」

床を転がり続けた先、壁もとい扉にぶつかる

アルバード「キーが無い開けられない仕様とかやり過ぎだろあの技術バカ」

行動の制限のためリツカが突貫工事でセキュリティ強化を図ったため

マスターキーがスバルに当たられている

い
解除は外からロックを外すか、マスターキーで中から開けることでしか入出ができません

アルバード「開け、ジャイアントトウモロコシ！」

スバル「変な呪文唱えても開きませんからね…」

不意に扉が開く

アルバード「開いた

スバル「そんなバナナ

アリサ「すみません、スバルさん。リーダー大人しくしてますか？」

アルバード「白か…」

空間が凍った

なんかそんな気がした

仰向けのアルバードは扉の前

入ってきたアリサも大体同じ位置

彼の視界には純白のアレが写っていた

そして

こ〇亀のBGMが流れる！

スバル「えっ、ナニコレ!？」

その次の瞬間、悲鳴と共に轟音が鳴り響く

アルバード「あ、あぶねええええ!!」

轟音の正体、アリサの持つ赤い神機だ

アルバード「そもそもなんで今持ってたんだよ!？」

アリサ「気にしたら負けですよ、リーダー!」

躊躇いもなく神機を振り下ろす

アルバード「死ぬ!当たったらぜってー死ぬってば!」

アリサ「安心して下さいリーダー。このBGMが流れてる間は何しても死にません、偉い人も言っていました」

アルバード「誰だよ!？」

ツツコミなどお構い無しに羞恥と殺意のこもった刃は連続して振りかかる

アルバード「だから、死ぬ!危なっ!切れたっ!今髪切れたっ!」

スバル「止めた方がいいかな…ん？」

振り回される神機に違和感がある

よく見るところ、稲光りしている

スバル「アリサさん！ブラッドアーツはまずいつて！」

アルバード「そうか！あれが！ブラッド←！アーツ→！なのか!？」

アリサ「ちよこまかと！避けないで下さい！前に私のこと受け止めてやるって！言つたじゃないですか！」

アルバード「それはまた別のお話で…つて殺意を受け入れるなんて言つてねえよ！」

アリサ「じゃあ、何だつて言うんですか!？」

アルバード「後で教えてやる、当て身！」

アリサ気絶

そして

BGM終了

アルバード「騒がしくてすまねえな」

スバル「大丈夫ですか？

アルバード「ああ、気絶させただけだ」

スバル「そうですか」

アルバード「…思わぬ形でお披露目されたな、ブラッドアーツ」

スバル「俺もこんな展開になるとは思いませんでした」

アルバード「とりあえず今日のところは訓練は終了だな。こいつを医務室に運ぶ」

スバル「あ、俺も…」

アルバード「いや、あんたは休んでてくれ」

スバル「…わかりました」

アリサを姫抱っこして医務室に向かった

スバル（もしかして、アルバードさんとアリサさんで恋人同士なのかな？今度それとなく聞いてみよう）

一人残ったスバルが訓練室に寝転び

ゴロゴロしていたらシエルが来て似たような状況になったのはまた別のお話

おまけ

医務室にて

アリサ「ん…」

アルバード「気がついたか？」

アリサ「リーダー、ずっと手繋いでくれたんですか？」

アルバード「いや、その、なんだ。前にもこうしたなあって思ってたよ」

慌てて手を離す

アリサ「おかげでいい夢が見られました」

アルバード「どんな夢だ？」

アリサ「ふふ、教えてあげません」

アルバード「気になるじゃねえか。あ、あとよ…さつきは悪かった」

アリサ「いえ、私も冷静じゃありませんでした。…リーダーはそういう人ですもんね」

アルバード「人聞きの悪い」

アリサ「ふふ」

アルバード「なんだよ急に」

アリサ「こうやってゆっくり話すのって久しぶりですね」

アルバード「フツ…そうだな」

願わくばリア充爆発しろ

第3話 俺の必殺技

アルバード「ビバ☆謹慎解除！」

神機のメンテナンスが終わり、スイーパーブランをベースにしたクレイドル制服を着た白の獣が野に放たれた

ヒバリ『今回の任務はヴァジュラの討伐及び周辺の小型アラガミの掃討です』

スバル「了解、じゃあ始めようか」

アルバード「今日はこの四人でお仕事か」

出撃メンバーはスバル、アルバード、シエル、アリサの四名

スバル「俺とアルバードさんで遊撃、アリサさんとシエルで援護、状況に応じて遊撃に変更でいいかな？」

三人「了解」

アルバード「ま、そんなきつい相手でもねえだろ？死なない程度にやりますかねえ」

アリサ「無茶はしないでくださいね？」

アルバード「善処する」

スバル「シエル、背中には任せたよ」

シエル「絶対に守ってみせます！」

スバル「か…肩の力は抜いてこうね？」

アルバード「と、目標視認。さっさと終わらせようぜ…」

散開の合図と共に臨戦態勢に入る

小型の一掃はすぐに終わった

そして、戦闘の音を聞きつけた通りすがりのヴァジュラさんとの戦闘に入った

飛来する雷球をかい潜り、斬りつけていく

射線を開けるように後退し、銃撃の雨が打ちつける

銃撃が止むとトドメを刺そうとスバルが宙へ舞う

スバル「一応見せておきます、俺のブラッドアーツ！」

地に足を着けないまま踊るように連続してヴァジュラを斬り刻む

絶命と同時に捕食を行い、軽やかに地に戻った

スバル「うん、終わったかな」

シエル「隊長、お疲れ様です」

アリス「ヒバリさん、ヘリの手配お願いします」

ヒバリ『了解しました、しばらくお待ちください』

帰投後、ミッションの報酬手続きを終えてラウンジで仕事後ティータイム

アルバード「で、ブラッドアーツってのはコツとかあんのか？」

スバル「コツ…ですか」

アルバード「なんかこう覚える時とかに『くつ…力が!?』みたいなのかねえのか？」

スバル「想像が何だか厨…ゲフンゲフン。そうですね、みんな気が付いたら使えてたり、弾の挙動に違和感を感じたりはするみたいですけど」

アルバード「あんたの時はどうよ？」

スバル「初めて撃った時は無我夢中でした」

アルバード「まあ、難しい事考えるよりまずは色々やってみるか」

スバル「うん、頑張ろう」

時は流れ一週間後：

アルバード「一向に変化がねええええorz!!」

二人の仲も大分打ち解け、出勤回数もかなりこなしたはずなのだが

喚起による血の目覚めはその兆しですら拝めずにいた

そんなある日

アルバード「なんか足りてねえのかな？」

スバル「そうですね、カノンさんもそこまでかかりませんでしたし」

アルバード「そんなバナナorz」

スバル「あ、でもどっかの誰かさんはぶん殴られて覚醒したような（チラッ）」

アルバード「ワハハ、ぬかしおる。ヒバリ嬢、ミッションの発注頼めるか？」

ヒバリ「はい、少々お待ちください。…アリサさん!?どうかしましたか!?新手のアラガミ!?そんな…当該区域に他のオラクル反応は無かったはずなのに…!」

ヒバリは凄まじい剣幕で被害状況や他の隊への救援をいれた

アルバード「ヒバリ嬢、何があった？」

ヒバリ「はい、帰投準備に入っていたアリサさんと第一部隊三名がハンニバル神速種に奇襲を受けコウタ隊長が負傷。今近くの区域にいた神機使いに救援を出しました。全員生存していますが予断を許さない状況です」

アルバード「わかった、その救援俺も向かう」

スバル「俺も行かせてください」

ヒバリ「…みなさんをお願いします」

アルバード「必ず」

時は飛ばし、目的地上空

へりから廃墟と化した市街地を見下ろす

アルバード「交戦している…？」

先に到着したと思われる部隊がすでに交戦を始めていた

アルバード「遠くてよく見えねえな…、よつと」

スバル「えっ？」

パイロット「え？」

かなりの高度があるはずなのに神機を担いで飛び降りた飛び降りた

いくら神機使いとはいえかなり危険な行為だ

スバル「無茶苦茶だ……すみません、そのビルの上をお願いします！」

アルバード「お、見えてきた」

時を少し戻し地上の状況は……

ジュリウス『こちらブラッド隊のジュリウス・ヴィスコンティ、救援に来ました』

アリス「救援感謝します、できる限りこちらにもバックアップに向かいます」

ジュリウス『無理は禁物です、こちらの処理が終わるまで待っていてください』

アリサ「いえ、難しそうですね。場所を嗅ぎつけられたみたいです。退路確保のためハンニバルの誘導を行います。…この地点までお願いできますか」

ジュリウス『わかりました、すぐに向かいます』

通信が切れる

コウタ「わるい、迷惑かけちゃったな」

コウタは利き腕を負傷していて簡単な応急処置が施されている

アリサ「無茶なところがリーダーに似てきましたね、コウタ」

コウタ「行くのか？」

アリサは神機を握りしめ立ち上がった。かすかにハンニバルの足音が聞こえる

エリナ「アリサさん、わたしも行きます！」

アリサ「いえ、コウタを安全に移動させるために二人は残っていてください」

エミール「くつ、先輩とはいえ女性を一人戦場へ向かわせるなど……！」

コウタ「こういう時に使うもんだったつけない。アリサ、第一部隊隊員への命令覚えてるか？」

アリサ「『命令は三つ、死ぬな』」

コウタ「『死にそうになったら逃げろ』」

アリサ「『そんでもって隠れろ』」

コウタ 「『運が良ければ不意を突いてぶっ殺せ』」

エリナ 「あれ、それって四つじや」

コウタ 「真面目なツツコミありがとう」

エリナ 「でも…それでもダメな時は…？」

アリサ・コウタ 「『生きる事から逃げるな』」

アリサ 「では、行きます！」

それから、威嚇射撃を繰り返し注意を引くように目的の地点へと到着

ブラッド隊と合流し交戦を開始する

アリサ 「やっぱりはやい…！」

ナナ「ううゝ全然当たらないよー」

ギルバート「ブラッドアーツもまともにあたりやしねえ…！」

リヴィ「小回りのきく攻撃も威力が足りない…」

シエル「流石に狙いが定まりません！」

ロミオ「あいつだったらこんなとき…」

一同は神速種に対して苦戦を強いられていた

アリサ「しまっ…!!」

変形の一瞬で不意に距離を詰められ、振り下ろされたハンニバルの右腕が確実にとらえたその瞬間

アルバード「おらよ！」

右腕は弾かれハンニバルの悲鳴にも似た叫び声をあげる

数秒経ってドスンと鈍い音を立ててハンニバルの角が落ちてきた

アルバード「あれ？頭斬り落とすつもりだったんだが、狙撃でずれたか…なっ！」

防げなければ後ろに立つアリサもろとも薙ぎ払っていたであろう尻尾の鞭をタワー
シールドで受け止める

アルバード「アリサ、ちよつと下がってろ」

すかさず捕食形態でハンニバルの腹に噛み付く

アルバード「せええええのおおお!!」

地面に足をめり込ませながらもハンニバルを上空へと投げ飛ばす

アルバード「てめえの女に手を出したんだ、タダで済むと思うなよ!!」

その場にいる全員がそれを目撃した

それは確かにブラッドアーツだった、しかしそれは今まで見たどのブラッドアーツよりも……

黒、漆黒のブラッドアーツだった

アルバード本人もちらりと手元を見て理解した

アルバード「これが俺の……丁度良い、名前を思い付いた。俺の必殺技「パート1」

ハンニバルのボルカノピノムに似たそれをこう名付けた

アルバード「ブラック・レイジ!!!」

放たれた黒い槍は宙に舞うハンニバルを貫き空中で霧散した

ロミオ「すっげー…」

凄まじい出来事に周りは唾然としていた

スバル「凄いな、あれがあの人ブラッドアーツか。ヒバリさん目標の討伐を確認へりの手配をお願いします」

10キロ離れた地点のビルから様子を見ていたスバル

改めて第一部隊『元』隊長の強さを知った

アルバード「あー、ダメだもう寝る…」

糸が切れたかのように仰向けに倒れて眠ってしまふ

アリス「もう、リーダーは…また無茶して」

シエル「ジュリウス、隊長がヘリの手配を済ませたそうです」

ジュリウス「そうか、では他と合流し次第すぐに帰投ポイントへ向かおう」

第一部隊、ブラッド、クレイドル。どこの隊からも死者を出さず、さらにアルバードのブラッドアーツ習得を成し遂げ、無事に帰還した

クリスマス特別編

4年の白紙 100年の約束

アルバード「クリスマスは今年もひーとリーですー、楽しくねー飯だけがー豪華な日です♪」

スバル「どうしたんですか？」

アルバード「いやね、遠征中のクリスマスの日ってさ。他の連中いちやいちやしてるなか俺コミュ障崇ってぼっちだったんだよ」

スバル「やめて！もう…もういいですから！聞いてて辛くなってるからからあ！」

アルバード「だが今は、違う。古巣に帰って来たんだ。コウタ…は家族で水入らずか。リンドウさん…もたまにはゆつくりとサクヤさんとレンの側において欲しいし。ソーマ…絶対断られる…」

スバル「…」

アルバード「…」

アルバード「ぼっち…！圧倒的ぼっち…!!」

スバル「ほ…ほら！アリサさんとかいるじゃないですか！」

アルバード「お前にはシエルがいるから言えんだろ！もしくはナナか!?それともエリナか!?」

スバル「あんたの中での俺の評価はどうなってるんだ!?!」

アルバード「大体嫌がられそうじゃん？」

スバル「そう思うなら試しに言ってみてください」

アルバード「よしこい、返討ちにしてやる」

スバル「はよ行け！」

アルバード「いいね、タメつぽくなってきたじゃねえか。そんじや行ってくる」

いぎ、アリサの部屋へ

アルバード「アリサー、入るぜ」

アリサ「あ…」

アルバード「…着替えるところだったか？」

アリサ「ギリギリセーフです」

アルバード「わりい」

アリサ「もう…ノックしてくださいって前にも言いましたよね？」

アルバード「次から気をつける」

アリサ「それで、何か用事があるんですよね？…もしかしてクリスマスのお誘い、なんて」

アルバード「ああ、それだ」

アリサ「リーダーにそんな甲斐性あるわ…け…」

アルバード「俺とクリスマスを過ごしてくれ（俺をクルシミマスから解放してくれ↑
副音声）」

アリサ「え…あの、その」

アルバード「もう予定埋まってるか？」

アリサ「いえ、そんなことはないんですが心の準備が…！」

アルバード「緊張するなよ、俺に任せておけばいい」

アリサ「…はい！」

スバル「上手くいったかな、アルバードさん」

シエル「隊長、お時間よろしいですか？」

スバル「ん、どうしたの？」

シエル「ブラッドの今後の活動についてまとめてみたので、目を通して貰えますか？」

スバル「りよーかい、ふむふむ…む？」

スバル（クリスマスの予定だけ抜けているな…）

シエル「その、クリスマスは友達と家族や友人と過ごすものだと言ってきました、君さえよければクリスマスに…」

スバル「ふふっ、いいよ。楽しいクリスマスを過ごそうか」

シエル「はい！」

スバル（バレットエディットだけで夜が明ける未来が見えた）

二組のカップルが成立したところでただの甘々な展開を許すほど読者と現実を優しくはない

クリスマス当日

アルバード自室

アルバード「こんなもんか」

テーブルの上にはカノン作の小さなケーキと飲み物、そして

アルバード「ハルさんからの差し入れか、なんだろ」

箱を開けてみると、チョコレートが入っている

アルバード「甘味？わーいアル甘味だいすき」

アルバード「毒味をしておこうか。いや決してつまみたいとかそんなやましい気持ちじゃなく、万が一のための保険というか、それはもうピユアっピユアな気持ちなんだあむ…、むぐむぐんむんぐ」

その食感サクサク、例えるならばそうクリスピーのような軽快な音を立て歯ごたえの楽しさを増すような

アルバード（あ、中からシロップ？みたいな甘いのが溢れてきた、美味しいな。ハルさ
んいいもんくれたな…ん？ちと眠いな、アリサが来るまで仮眠で…も）

アリサ「リーダー？入りますよー」

アリサ「あれ、リーダー寝ちゃってますね」

アルバード「んん、アリサカー」

アリサ「具合でも悪いんですか？」

アルバード「うんにゃ、らいじょーぶらよお」

アリサ「リーダー？まさか酔ってます？しかもそのウイスキーボンボン一個で!？」

アルバード「酔ってらんからいよお！」

アリサ「酔っ払いの常套句じゃないですか！」

アルバード「ジョーとクー？男か!？」

アリサ「違います！って、わっ!？」

アルバード「捕まえたー、どこだー!どこに男の痕があるんだー!」

アリサ「暴れないでください…ひゃあ！」

アルバード「アリサのいいにおひしかしない…くんかくんか」

アリサ「嗅がないでー!!」

アルバード「…」

アリサ「り…リーダー？」

アルバード「アル」

アリサ「は？」

アルバード「アルってよべよー！いわないとこうらぞー！」

アリサ「わかりました！アル！だから服の中を弄るのは、きやつそこは！」

アルバード「…」

アルバード「…zzzzZZZZ」

アリサ「あれ…寝ちやった。すごく満足そうな顔しちゃって、ふふっ」

アリス「もう少し落ち着いてくれば良いんですけどね。けど、今日はこのまま貴方を感じながら眠るのも：悪くありませんね」

ソファアの上で離れていた空白を埋めるように抱き合いながら静かに眠りについた

一方その頃ブラッド区画の一室

ブラッド隊で軽いパーティーをし解散した後スバルの部屋にシエルが訪れていた

スバル「少し待ってて紅茶淹れてくるから」

シエル「いえ、そんなお構いなく」

スバル「友達に遠慮なんてしないの」

シエル「そう…ですね、友達ですし…」

スバル「よし、エミールからの頂き物なのが癪に障るけどやっぱり良い茶葉で淹れる紅茶は薫りが違うね。あとはこれを…」

スバル「はい、お待たせ」

シエル「ありがとうございます。あ、今日のは少し薫りが強いですね」

スバル「ブランドーを入れてみたんだ、アルコールは飛んでるから平気だと思うよ」

シエル「すごく、美味しいです」

スバル「ありがと。それとこれ、お茶請けにつてハルさんからの差し入れ。チョコレートみたいだね」

スバル（…そうだ！）

スバル「シエル、あーん」

シエル「えっ？」

スバル「ほら、口開けて。あーん」

シエル「あ、あーん」

スバル「どう？美味しい？」

シエル「はい、甘くて、なんだかふわふわします。なんというチョコレートなんです
か？」

スバル「ウイスキーボンボン…って酒じゃん！ごめんシエル！ちゃんと見ておくべき

だった！」

シエル「いえ、気にしないで下さい。君の厚意が嬉しかったんですから」

シエル「ところでここ暑くありませんか？」

スバル「え、暖房効き過ぎてたかな…？あの、シエルさん。どうして上を少しはだけさせてからこちらに迫ってくるんですか？」

シエル「こうすれば少し涼しくなるかと」

スバル「シエルさん、どうして俺は押し倒されたんでしょうか？」

シエル「君がいけないんです」

スバル「え、俺!?なんかしたっけ…」

シエル「最近、一層エリナさんとても仲がよろしいように伺えます」

スバル「まあ、仲間として打ち解けたよね」

シエル「リツカさんともよく話し込んでおられますね」

スバル「エンジニアとの信頼関係って大事だもんね」

シエル「君は少し自分の魅力に気付くべきです。君は人を惹きつける才能があります。ブラッド隊長に任命されたのも君への信頼が厚かったからです。ですが、君は少し優しすぎます。誰にでも優しくなれることも素敵だとは思いますがほかの女性が勘違いをなさったどうするつもりですか。信頼や好意を向けられることは全体にとって大切ですけれど……!」

スバル「シエル……」

シエル「他の女の子じゃなくてもっと、私を見てください!」

スバル「…本音が聞けて嬉しいよ、じゃあ俺のこの特別な感情はやっぱりシエルにあげる」

スバル「好きだよ」

シエル「私もです、好きです、大好きです！愛しています！」

スバル「ちよつと照れくさいね」

シエル「あの」

スバル「ん？」

シエル「このまま君の胸をお借りしても良いでしょうか？」

スバル「存分に」

シエル「では、失礼し…て…。すう…すう…」

スバル「あはは、アルコール入ってるせいかな早いね。ま、いいか。おやすみ、シエル」
2人の未来が100の年を経ても続きますように

ささやかな聖夜のちよつとしたプレゼント

後日談

よいが覚めた人間には2パターンある

ひとつは

アルバード「あー、昨日の晩寝落ちしちまったわ。悪いなアリサ」

アリサ「な…な…！」

アルバード「なにワナワナしてんだ？」

完全に忘れるタイプ

そしてもうひとつは…

シエル「すみませんでした！」

スバル「土下座!?!いいよ気にしてないから!むしろ嬉しかったくらいなんだし」

シエル「ですが君の前であんなはしたくない事を…！」

スバル「そう?積極的なシエルもなかなか可愛かったけど、土下座はやめて!勘違い

されそう！」

シエル「重ね重ね申し訳ありません！」

スバル「もういいからー！」

完全に覚えちゃってるタイプ

モチロンハルオミはしめました

正月特別編 明けましておめでとうござい…

アルバード「セーのっ」

全員「明けましておめでとうございます！」

今日、聖域に設けられているセーフハウスで新年会が開かれている

今回のBGMは正月といえはこれという…なんかこうイメージ的に三味線と尺八の演奏をお届けします。ちなみに今回は

アルバード「お前三味線弾けんのな」

スバル「そつちこそ尺八吹けるんですね」

生演奏でお送りしました

コウタ「さて、みなさん飲み物は行き渡ったかな？それでは、えーごほん！今年もよ

ろしくお願いしまーす!」

全員「お願いしまーす!」

アルバード「はいいここでコウタが一発芸いきまーす」

コウタ「どんな無茶ぶりだよ!?!」

全員「いえーい!」

コウタ「お前らウケなくても文句言うなよ!?!」

スバル「あ、やるのね」

コウタ「入隊したてのアリサのモノマネいきまーす!」

アリサ「やめてえええええ!」

アルバード「それ、ブラッドとか新参わからなくね?」

コウタ「あ、それもそっか」

ブラッド（ちよつと気になった…）

コウタ「じゃあ、ソーマのモノマネいきまー…うお!?! ナイフ飛んできた!?!」

ソーマ「…（ギロ）」

コウタ「じゃあ、無難なところで：話の腰を折ってからヒバリさんデートの誘うタツミさん。『そんな事よりヒバリちゃんだよヒバリちゃん。ヒバリちゃん、デートしよーぜー』」

約全員「ああ…」

タツミ「うおい！なんだよみんなしてその反応！」

アルバード「なんかいつもあんな感じだわ。まあそんな事より今日は聖域で採れた食物をふんだんに使った料理も並んでるわけだし、食おうぜ！」

タツミ「そんな事とは…」

約全員「いただきますーす」

タツミ「うおおい！…いただきます」

アルバード「タツミは少し大人になった」

タツミ「変なナレーション入れんなよ！」

アルバード「まあ、今回ぶつちやけた話あんまネタがないからさ」

スバル「ぶつちやけ過ぎ」

アルバード「今年の抱負でもやってから終わろうかと、はいコウタてめえからやれ」

コウタ「また無茶ぶりしやがって…えーと、今年もつと隊長らしくなろうと思いま
す」

アルバード「はーい、ドゥンドゥン行くぞー。次ソーマな」

ソーマ「：レトロオラクル細胞の技術体系化」

アルバード「案外素直に答えたな、次アリサ」

アリサ「私は、サテライト拠点の増設ですね」

アルバード「真面目だねえ。リンドウさんは？」

リンドウ「んー、じゃあ死なないってことで！」

アルバード「死亡フラグ勘弁。じゃ、サクヤさん」

サクヤ「そうね、レンが健やかに育ってくればそれでいいわ」

アルバード「そつすね。じゃあレン、今年は何か頑張りたいことあるか？」

レン「パパみたいにつよくなる！」

アルバード「そつか、頑張れよ」

スバル「じゃあ、次にブラッドサイド行ってみますか。ジュリウス、今年の抱負は？」

ジュリウス「皆が共に道を歩めること、だな」

スバル「うん、みんなで頑張ろつか！じゃあ、ナナ」

ナナ「今年もいっぱい食べる！」

ロミオ「ナナのはいつも通りじゃん」

ギルバート「ははっ、違うない」

スバル「じゃあ、ロミオ」

ロミオ「俺？そーだな、みんなが笑って過ごせるように、強くなる」

スバル「おお。次ギル」

ギルバート「技術面においてブラッドを支えたいと思う」

スバル「頼もしいね、リヴィは？」

リヴィ「私、か。ブラッドを通してもっと見聞を深める」

スバル「じゃあ、さっきから俺とまったく目を合わせようとしないうシエル副隊長」

シエル「あ、えっと、その！責任とります！」

ブラッド「？」

スバル「なんか変な空気になっちゃったな。大丈夫だって、気にしてないから」

シエル（それはそれで複雑です…!!）

アルバード「じゃあ、引き続き他のテーブル行ってみようか。第一部隊のエリナとエミール」

エリナ「ちょっと、おじ…アルバードさん！こいつとセットにするのやめてください！」

アルバード「ああ、わるい。じゃあ抱負を」

エリナ「人類の為に華麗に戦う（どやっ）」

アルバード「…次」

エリナ「待った！今の間何!？」

エミール「人々の安らかな営みを蝕む闇の眷属共を、このエミール・フォン・シユトラスブルクが！我が神機ポラーシユターンと共に…」

アルバード「あ、これ長いやつだ。たいさーん」

エリナ「エミール！あんたは少し黙って！あ、逃げられた!！」

エミール「その道は長く険しいものだろう…！だがしかし、僕は1人ではない！多くの人々や仲間を支えられて…」

アルバード「じゃあ、次防衛班と第四部隊ー」

スバル「タツミさんの抱負をどうぞ」

タツミ「ヒバリちゃんとデート!！」

アルバード「無理ぽ（頑張れ）」

スバル「逆、逆」

アルバード「じゃあ次、大馬鹿ノンちゃん」

カノン「今、悪意のある言い方してませんでしたか!？」

アルバード「ほら、押ししてるから（作者の脳が）」

カノン「誤射を少なくしたいです!」

アルバード「無くせよ!」

スバル「次は、ブレンダンさん」

ブレンダン「皆の足を引つ張らぬよう、精進する」

アルバード「先生は真面目だな。ジーナさん」

ジーナ「今年も綺麗な花をたくさん咲かすわ」

アルバード「はい、平常運転。次はヒバリ嬢…」

シユン「おいおいなに華麗にスルーしてくれてんだ!？」

カレル「構ってもらえなくて寂しいのか?」

シユン「うるせー、そんなんじゃねえよ俺は…」

無言の腹パン

シユン「…ぐはっ!？」

カレル「なぜっ…!?!」

カレルに關してはただのとぼっちりです

アルバード「では氣を取り直してヒバリ嬢」

ヒバリ「今年も精一杯皆さんをサポートします!」

アルバード「実家のような安心感」

ヒバリ「あ、すみません。連絡が…支部付近にアラガミの反応、10キロ地点ですか。

わかりました」

アルバード「ん、お開きかな」

スバル「そうみたいです」

アルバード「そんじやまお前ら!行きますか!」

約全員「応!」

第4話 血縁がトラウマ連れてやってくる

スバル「どうか厄介事ではありませんように……」

今日、ブラッド隊はサカキ支部長に呼ばれラボへの招集をかけられた

ナナ「あはは、隊長ってばそんな必死に祈らなくても」

ジュリウス「だがブラッド全員に召集がかかるのは何かブラッドに関わる重要な案件なのかもしれないな」

スバル「うぐっ」

ギルバート「はは、まあ並大抵のことじゃ驚かないだろ。2名を除いては」

ロミオ「ナナと…誰だ？」

ナナ「あ、私は確定？」

リヴィ「ロミオだろうな。お前は感受性豊かだからな」

ロミオ「あー…褒められてるか微妙な線だな」

シエル「もしかしたら一番驚くのは隊長かもしれませんね？」

ギルバート「そりやまたどうして」

シエル「女の勘です」

スバル「ははっ！シエルも冗談を言えるようになって俺は嬉しい限りだよ」

ナナ「じゃあ、私とロミオ先輩と隊長。誰が一番驚くか当ててみようよ！」

スバル「じゃあ、いい出しっぺのナナで」

ジュリウス「大穴で隊長」

シエル「私も隊長で」

ギルバート「ロミオ」

リヴィ「私もロミオで」

ナナ「じゃあ、私もロミオ先輩」

ロミオ「ならおれはナナだな」

スバル「お、ロミオがトップか。それじゃ、実際行ってみようか。ブラッド隊、入り
ます」

扉を開ければいつもニコニコ、あなたを見守るスターゲイザーことサカキ支部長が待ち構えていた

サカキ「やあ、よく来たね。今日は君達にいい知らせを持ってきたんだ」

スバル「おおー、してそれは」

サカキ「君達ブラッドに新しい隊員が増える事になったんだ、もう待機してもらっているよ」

スバル（うちの男女比率は4：3：3：女の子とみたね！）

なにその理論

シエル（今なにか苛立ちを覚えたよう नाही ないようないよな…）

サカキ「さあ、出ておいで」

??? 「失礼します」

その時、スバルに電流走る

シルフィ「本日より配属されました。ブラッド候補生、シルフィと申します。若輩者ではありますがどうぞよろしくお願いします」

刹那、それは雷光の如く瞬発的に

流麗の如くなだらかに

風の如く静かに

スバルはギルバートの後ろに隠れた

シルフィ「いつも兄がお世話になっております」

約全員「兄？」

スバル「…」

ロミオ「俺たちは孤児だし…ギル？」

ギルバート「いや、違う」

視線が一点に集中する

スバル「チガウヨ？」

シルフィ「お兄ちゃん、その人の後ろから出てきてくださいいな」

ギルバート「おい隊長、しがみ付いてないで顔見せてやれよ」

スバル「急用を思い出した、じゃ☆」

シルフィ「何処に行くのですか？」

しかし、回り込まれてしまった！

スバル「うわあ！」

シルフィ「うふふ、お兄ちゃん。どうして逃げるんですか？」

シエル「隊長、顔色が悪いですよ？」

スバル「だだだ大丈夫だ！問題ない！」

フラグオンの音が響く

スバル（餅つけ…餅つくんだ俺。餅つく為に過呼吸するんだ！）

シルフィ「兄がお騒がせしてすみません。えい」

スバル「はう…」

シエル「え、今何を？」

シルフィ「鎮静剤を打ちました、大丈夫です眠っているだけですのぞ」

シルフィ「では改めて、皆さん兄共々よろしくお願いします」

後日、目を覚ましたスバルにシルフィの血の力覚醒のため

しばらく行動を共にするようにと通達があった

その時の彼の表情は真っ白にもえつきていたという

第5話 お兄ちゃんだけど愛さえあれば r y

シルフィ入隊から数日

スバル「穏やかなる俺の日常は、ある圧倒的な存在によつて激変した！

スバルは歌っていた

アルバード「え、何してんの？」

スバル「あ、アルバードさん…うう…」

アルバード「お、おう。男子が何を涙する」

スバル「シルフィがいるだけで心が折れそうです」

アルバード「そんなにか」

スバル「そんなになんです」

アルバード「けどよ、ブラッドの新人つーもんだからどんなやつか見てみたけどさ。協調性よし、性格よし、衛生兵としても優秀だ。悪い点は見当たらなかつたな」

スバル「それは他人の評価、身内の評価はそれに加え、壮絶なブラコン…なんですよ」

アルバード「あつ（察し）とは言えど流石に、風呂入ってる時に入ってくるのか、お前さんの下着臭いで興奮するようなヤバイのではないだろう？」

スバル「…」

なお、沈痛な面持ちの模様

アルバード「えっ、マジで？」

スバル「最近、俺のパンツが減ってるんです…！」

アルバード「いたたまれねえ…！」

シルフィ「お兄ちゃん、こんなところで何してるんですか？」

スバル・アルバード「ひい！」

シルフィ「嫌ですね、そんな驚かなくても。…何かやましい話でもしていたんですか？」

スバル「お前には関係のない話だ愚妹」

シルフィ「嘘はいけませんよ、私お兄ちゃんの事なら何でもわかるんです」

スバル「ハイライトさんを排除するのはやめろ！」

アルバード「あれ任意で出来るもんなのかよ…」

シルフィ「お兄ちゃんは私だけを見ていれば良いんです」

スバル「やめろお！その目のままでこっちに来るなあ！」

アルバード「あ、俺仕事あるんで」

スバル「裏切り者ー！」

シルフィ「さあ、程よく実った妹という甘い果実をむさぼ…！」

アルバードがシルフィの横を通り過ぎた瞬間、動きが止まった

クレイドルの紋章を背負ったその背中をシルフィは不思議そうに見送った

スバル「…珍しいな。お前が他人を気にするなんて」

シルフィ「あの人、お兄ちゃんと同じ匂いがしました」

スバル「怖いからさらつとと言うのやめない？」

シルフィ「あ、そーだ。お兄ちゃん、デートしましょう」

スバル「お前の思考回路はどうなってんの!？」

シルフィ「作者と一部と同じ感じですよ」

スバル「それは重症だ」

屋上

シルフィ「本当は少し買いたい物があったけれど、まだここに疎くつて」

スバル「それなら普通に案内してほしいって言えよ」

シルフィ「うら若き男女が並んで歩けばそれはデートです」

スバル「他を…」

シルフィ「しばらく会えていんかつたんです。少しくらい、甘えさせて下さい」

スバル「なら、少しは大人しく…」

シルフィ「断つたらお兄ちゃんのクローゼットの中身全部女物の服にすり替えます」

スバル「ひと言余計なんだよ！」

結局、ついて行くことになりましたbyスバル

そして買い物シーンはカットで休憩なう

シルフィ「あんまりです」

スバル「えっ、なんか言った？」

シルフィ「気のせいです、それよりお兄ちゃん」

スバル「なんだよ」

シルフィ「お兄ちゃんにはシエルさんのこと好きですよね？」

スバル「ぶっ！げほつがはっ」

シルフィ「当たり前…ですか」

スバル「ち…ちがうぞ。シエルはその、なんだ家族みたいなもんでな」

シルフィ「胸か！やっぱり胸ですか！ええ、確かにあの手に収まりきらないほどのメ

ロンに目を奪われることでしよう！それに加え控えめな性格！引き立てる！」

スバル「餅つけ！俺は胸で人を好きにはならん！」

シルフィ「そんなこと言つて、知つてるんですからね！シエルさんのを見て鼻の下伸ばしてたり、ちよつと手が触れただけで急に離れて初々しい反応したり、夜な夜な部屋からシエルさんの名前を呼びながらギシギシと……！」

スバル「おい、最後の捏造やめい！」

シルフィ「私だつてあれほど大きくはありませんが形はイイほうだと思います！」

スバル「ええい、当て身！」

シルフィ「あふん」

シルフィ、KO

スバル「わかってるよ、俺がシエルのこと好きだつてことくらい」

軽々と妹を背負う兄

スバル「あまり臆病者の兄を急かしてくれるな」

??? 「にゆるふふふふ」

バレンタイン特別編

寂しさを残す空母の残骸の上

夕焼けに二つの影が落とされている

ひとつは桃色の長い髪を結んだポニーテールを揺らし

ひとつは夕焼けに映える黄金色の短髪を煌めかせている

黒松高等学校の制服に身を包んだ少女は頬を赤らめながら、後ろに手を回し恥ずかし
そうにしている

その手にはリボンでラッピングされた袋が握られている

「あ、あの…」

一間おいて絞り出すように少女は声を出した

そして勢いよくお辞儀すると同時に箱を差し出す

「先輩、その…受け取ってください!!」

ふわりと風が吹く

それは恋の行方を示したのか

あるいは…

スバル「いや、これなんの茶番？」

シルフィ「こういうのぐつときませんか？ムラムラしません？私の赤ちゃん欲しくありません!？」

スバル「やかましいぞ、駄妹。さっさと帰投する」

シルフィ「せめて！せめてチョコだけでも！」

スバル「わかった！貰うからズボンを脱がそうとするな！」

帰投後、ラウンジにて

カノン「みなさーん、今日はバレンタインですよ〜」

アルバード「わーい」

スバル「何やってるんですか」

アルバード「クツキー貰ってんだ」

カノン「ボルケーノクツキーです、スバルさんもどうですか?」

スバル「なんてデンジャラスな名前」

アルバード「年々名前の威力が上がってんな」

スバル「あ、アリサさんだ。…あれ、アルバードさんが消えてる」

アリサ「リーダーがどこいったか知りませんか!？」

スバル「さつき、煙のように消えました」

アリサ「露骨に逃げてますね、探してきます」

シエル「隊長、少しよろしいでしょうか？」

スバル「うん、何かな」

シエル「部屋に来て貰ってもいいですか」

スバル「？」

ブラッド区画、シエル自室

シエル「えっと、そのチョコを受け取ってください！（唐突）」

スバル「はい！（混乱）」

スバル・シエル「…」

スバル「落ち着こうか」

シエル「はい…」

スバル「えっと、バレンタイン？（良発音）」

シエル「はい、その手作り…です」

スバル「本当!?!やべ、めっちゃ嬉しい…!食べてみていい?」

シエル「どうぞ、召し上がってください」

スバル「では、ひとつ…。紅茶に合う程よい苦さ、すごく美味しいよ」

シエル「良かった…」

スバル「こんな美味しいの貰っちゃったら、ホワイトデーはすごいのお見舞しなくちやなあ」

シエル「お返しなんて気にしないでください、君には貰ってばかりなんですから」

スバル「貰ってるのはお互い様だよ」

シエル「そうでしょうか？」

スバル「そうなの」

シエル「では、そういうことにおきましよう」

スバル・シエル「ふふっ♪」

少し甘めのハッピーバレンタイン

一方その頃

アリサ「リーダー、今回はいい出来だと思えます」

アルバード「なら何故目隠しをして腕を縛る必要がある」

アリサ「だって逃げるじゃないですか」

アルバード「お前が追いかけてくるからだろ！だいたい…んぐ?!」

アリサ「ほら、どうですか？（カノンのクッキー）」

アルバード「んむんむんむんぐ、表面はサクサク中はしっとり甘過ぎないところもい

い。茶が欲しくなる」

アリサ「はい、あーん（自信作のクッキー）」

アルバード「んむんむんむんぐ、表面はゴリゴリ中はネバネバ甘過ぎず苦過ぎる味わいが…んごぼっ！」

アリサ「やっぱりダメでしたか」

アルバード「に、苦え！砂糖無しのカカオマスを黒焦げにした後に口に突っ込まれた感じがする！」

アリサ「あ、拘束外しますね」

アルバード「最初のはカノンのクッキーか！味見はしたんだろうな！」

アリサ「モチロンドエストモ」

アルバード「いい度胸だ、今夜は眠れないと思え！」

アリサ「リーダー、そんな強引に…！」

アルバード「後ろをとつちまえばこつちのもんだ。今夜は体が覚えるまでやるからな
！」

アリサ「そんな、昨日も徹夜だったのに…！」

アルバード「俺が満足するまで寝かせはしねえ！」

このあと滅茶苦茶、料理の基礎を叩き込んだ

第6話 血の覚醒（仮）

とある日の帰投後のこと

ラウンジ窓際カウンター席にて

スバル「はー…まだ神融種はきついなあ」

アルバード「なあ…」

スバル「うん？」

アルバード「シエルとは上手くいつてんの？」

スバル「ななななななんですかいきなり!？」

アルバード「いやさ、実はこのあいだ偶然妹さんといるところを見かけてさ、そしてら哀愁漂う顔で『わかってるよ…シエルのこと』…」

スバル「わー！わー！わー！」

アルバード「なあに、恥ずかしがるこたあねえよ」

スバル「からかわないで下さいよ」

アルバード「からかってなんかねえよ、俺たち神機使いはいつでもどこでくたばるかかわらん職業だ。だからさ、後悔しそうな要素があつたら真っ先に解決しとけ」

スバル「アルバードさん…」

アルバード（やべ、人の事いえねー！）

スバル「俺、頑張ります！」

アルバード「お、おう頑張れ」

アルバード「…次回から本気出す」

場所は変わりブラッド区画

スバル「ふー…よし、シエル入ってもいいかな？」

シエル「隊長ですか、いいですよ」

スバル「んじや、失礼してつと…」

そ・れ・か・ら☆

スバル（ヤバイ！あれから結構経ってるのに会話が聞こえ続かない…！）

シエル「あ、紅茶淹れましょうか？」

スバル「あ、うん」

シエル「…」

スバル「…」

スバル・シエル（なぜか気まずい）

スバル「シエル」

シエル「はい！」

スバル「えーと、その、あれだ。今日は良い天気だね？」

シエル「そ、そうですね」

スバル（しまった！自分から会話の墓場に突っ込んじゃまった…!!）

ええいさつさと告らんか！

スバル（こいつ直接脳内に…!!）

ブラッド区画・部屋扉前

ナナ（あ、静かになった。チューしてるのかな？）

ギルバート（あの2人に限ってはないだろ）

ロミオ（と言うか、まだくつついなかったんだな）

リヴィ（まだ会って1年ほど何だろう？健全で良いんじゃないか？）

ナナ（いやいやリヴィちゃん、一年以上アレを見せられてると流石にもう良いでしよって思っちゃうんだよ）

リヴィ（そういうものなのか？）

ロミオ（…やっぱり結婚まで行くのかな？）

ジュリウス（それなら神父は俺がやろう）

ナナ（ジュリウス話飛ばしすぎw）

ロミオ（…）

リヴィ（ロミオ？どうかしたのか？）

ロミオ（いや、さ。2人が式挙げるところ、2人の晴れ姿とかさ、ラケル博士に見ても
らいたかつたなつて…）

ギル（その時は全員で見せに行けば良いだろう。報告も兼ねて、な）

ロミオ（…うん、そうだな！）

扉、セツトオープン

L・I・O・N！ライオン！

ロミオ「今の何だ!？」

スバル「やあ、イイハナシダナーのところすまない。お前ら何してんだ？」

ナナ「あはは、隊長おはよう？」

スバル「質問に答えないとはい良い度胸だ、あとでチキンの刑に処してあげようね」

ナナ「チキンの刑!?!」

説明しよう！チキンの刑とは

相手を縛り付け目の前でただおいしそうにチキンをたべる、飯テロ行為のことである

スバル「それに、ナナやロミオならともかく、ジュリウスにギル、リヴィちゃんまで」

ジュリウス「少しやってみたかった」

リヴィ「同じく」

スバル「…稀な茶目っ気だし、不問」

ナナ「ひどい」

スバル「ギルはチキンの刑を手伝うこと、縄じや無理」

ギルパート「了解」

ナナ「ギルのうらぎりものー！」

スバル「おだまりおでんパン。ロミオ」

ロミオ「俺も抑える側に…」

スバル「ありがと」

ロミオ「へ？」

礼を言った、後部屋の方で待機していたシエルを連れてくる

シエル「なぜみんなが…」

スバル「ー俺はさ、この部隊が好きだ。ジュリウスがいて、ロミオがいて、ナナギル、シエル、リヴィちゃんがいる。いわば家族みたいなもんだね。だから、隠し事みたいにならないように今ここで言うよ…」

スバル「シエルのことー」

放送「ーブラッド隊、感応種出現により出撃要請が掛かりました。直ちに…」

スバル「…」

ブラッド「…」

スバル「スバルに何か落ち度でもおおおお!!?!?」

ナナ「どんまい」

スバル「帰ったら絶対言うからな！もう大声でlove youと叫んでやる！！（ヤケクソ）」

ロミオ「もう言ってる」

スバル「おのれゆるさん感応種！（八つ当たり）」

この後、任務が終わって帰投して公衆の面前で告白して妹が乱入してちよつとした騒ぎになった

おまけ☆

前の騒動でシルフィが『お兄ちゃんどいてそいつ殺せない』状態になり

スバル「怪我した…痛い」

シルフィ「お兄ちゃんちよつと診せてください」

スバル「ああ、お前衛生兵だっけ」

シルフィ「はい、治りました」

スバル「え？」

シルフィ「まだ、傷みますか？」

スバル「痛く、ない」

シルフィ「良かった、この間目覚めといて良かったです、血の力」

スバル「え？」

シルフィ「この前のデートでもう目覚めてたんですよ血の力」

スバル「えー…」

ホワイトデー特別編

スバル「ホーホワイトデー」

アルバード「そう、ホワイトデー。受け取った熱い想いに純白の心を返す日」

スバル「ところでどうしても聞きたいことがあるんだ」

アルバード「奇遇だな、俺もだ」

アルバード・スバル「タツミ・さんさ、ヒバリ嬢・さんにチョコ貰えてた？」

タツミ「ふつ、そんなの当たり前だろ」

アルバード「ああ、めっちゃやしつくく迫って呆れ気味にくれたんだろ？」

タツミ「つて思うじゃん？」

スバル「思わない」

アルバード「わかった、ちよつといびつな形のチョコを『失敗したのでよろしければ』とかなんとか言って渡されたんだな」

タツミ「…」

スバル「凶星？」

アルバード（ま、どうせわざといびつな形の作って言い訳にした本命チョコだろうな。
ヒバリ嬢も素直じゃない）

タツミ「お返ししてどうすればいいんだ？」

アルバード「結婚指輪でもさっさと渡してこいよ」

スバル「そのままちゅーだ」

タツミ「お前ら仲いいな」

アルバード・スバル「我々はタツヒバを全力で応援している」

本編始めるか

アルバード「で、三日三晩ゴロゴロしながら考えてみた」

アリサ「空木レンカを見習ってください」

アルバード「シリアスなんて他所様に任せとけ。で、ジャイアントトウモロコシを使ったポツプコーンを作ってみた。こいつをどう思う？」

アリサ「すごく、大きいです」

アルバード「ただ食べて貰うだけでは物足りないので、はいあーん」

アリサ「恥ずかしいですよ」

アルバード「なんだよお前もやったくせに」

アリサ「やる側はわりと平気なんです、目隠しもしてましたから」

アルバード「お前が！食べてくれるまで！泣くのを止めない！」

アリサ「男泣き止めてください！わかりましたよ、食べますよ」

アルバード「あーん」

アリサ「あーん……。美味しいです」

アルバード「そいつは良かった」

アリサ「けど物凄く負けた気がします」

アルバード「なら料理に神機を持ち出すな、余計な冒険はするな、ノルンのレシピ通りに作ることから始めろや」

アリサ「でも包丁ってどうも馴染まなくて…」

アルバード「だからって神機はない」

アリサ「あう…」

アルバード「まったく、将来的に俺が台所に立つ羽目になりそうだなおい」

アリサ「な、何言ってるんですか!?! ドン引きです!」

アルバード「え? なんかも変なこと言った?」

アリサ「いえ、何でもないです!」

アルバード「そうか?」

アリサ(リーダーがお嫁さん…)

アリサ（アリ、かも？）

いつも通り所変わってブラッド区画・シエルの部屋

スバル「ホワイトデーのお返しに焼きマシユマロ作ってきたんだ、ちなみに出来立て」

シエル「マシユマロを焼くんですか？」

スバル「すごく美味しいんだ、食べてみて食べてみて」

シエル「では、いただきます」

スバル「どう…かな？」

シエル「普通のマシユマロよりも温かく口溶けが良くて、優しく広がるように甘くて美味しいです」

スバル「よかったあ、紅茶淹れるね。誠に不本意な事にエミールからいい茶葉譲って貰ったから」

シルフィ「お兄ちゃん！逆ホワイトデーですよー！私を食べてくださいーい！」

スバル「こっちくんな」

シルフィ「卑しい人ですね、マシユマロコーティングでお兄ちゃんを誘惑するつもり」

スバル「燕月閃！」

理由のあるサマーソルトがシルフィを襲う！

アルバード「うお!?!なんか飛んできた!?!」

スバル「ごめん、うちの馬鹿が騒がしくて…」

シエル「問題ありません、マシユマロありがとうございます」

スバル「適応早いな…」

第7話 想い合い

あの人はどう思っているのだろう

私のことを

アリサ・イリーニチナ・アミエーラの事を

ただの部下？

それとも、背中を預ける戦友？

気になる人、だったらいいな…

ちくわ大明神

誰ですか今の

：最近、あの人は他の女性にばかり構ってる気がします

リツカさんをはじめ、エリナさん、ジーナさん、ヒバリさん、カノンさん

あの人はあれですか、一級フラグ建築士の資格でも持つてるんでしょうか

思い返せばアネットもそこそこ好感的だった気がします

仕事上関わる人なのは分かりますがどうしてこう、偏差値の高い人ばかりですかね

私が前にロシア支部に戻ろうとした時、急に寂しそうな顔して『行かないで欲しい』ですよ

普段サングラスのせいで表情解りずらいですけどあれは反則でしたね

そのまま部屋に持ち帰って押し倒してやろうかと思いました

厄介なのは自覚がありそうでないんですよ、あの人は

さらっと可愛いとか平気で言いますし…

…？

あれ、私もしかして

アリサ（あの人が酔っばらった時でさえ好きって言われたことない…？）

どう思われているんだろうな

アルバード（以下略）

さぼんな

アルバード（しよぼーん）

最近、なんかこうアリスに睨まれてる気がしてならない

リツカに神機の相談してるときとか

ヒバリ嬢とタツミの話題を混ぜつつ 世間話をしたり

エリナをからかって遊んだり

カノンに罪を数えさせたり

まあ、女性と話している時だな

なんかすごく視線を感じるだよ

言い表すと物陰からピターに睨まれてる感じ

ありや、ホラーだ

視線に殺されるかと思ったわ

それもこれもクリスマス次の日あたりだ

あの日の記憶のない時間帯に何かがあつたに違いない

まず、アリサをクリスマスの夜と一緒に過ごしてくれと誘ってOKされた

…ここからすでに問題が生じてる気がする！

なんだよ一緒に夜を過ごして欲しいとか

誘ってんのかあ？（一方通行風）

もう全部俺が悪い気がする

でも向こうからOKもらったしセーフだ

俺は悪くねえ（親善大使風）

次だ

チョコ食って寝て朝チュン、起きたらそこには衣服の乱れたアリサ

あかん、典型的に俺が悪い気がしてきた

もうこれは責任取るとかそういうレベルだよ

よし、腹を括ろう

いざ行かん

所変わりにてアリサのお部屋

アルバード「というわけで来たぜ」

アリサ「すみません話が見えません」

アルバード「きやくきやくしかじか」

アリサ「…端的に言うとな責任を取りに来た、と？」

アルバード「さあ！煮るなり焼くなり好きにするといい！」

アリサ「…『好きにしている』？」

アルバード「お…男に二言は、ない！」ひぎぶる

アリサ「怯え過ぎですよ」

アルバード「優しくしてね？」

アリサ「じゃあ目を閉じてください」

アルバード「ひいいい！」

アリサ「閉じたら絶対に動かないでください」

アルバード「…」

アリサ「えい」プスッ

アルバード「いつ…!?何を注射した!?!」

アリサ「ちょっと素直になるお薬（リツカ作）です」

アルバード「なんということをしてくれたのでしょうか」

アリサ「リーダーは私の事好きですか？」

アルバード「NO」

アリサ「死にたくなりました…」

アルバード「これは質問に問題が」

アリサ「と、いいますと」

アルバード「好き？違うね、大好きなんだ！」

アリサ「あの、リーダー？」

アルバート「大体なんなんだよその格好はよ？チラチラ見せつけてきやがって、たまに目のやり場に困るんだよ！」

アリサ「これは、胸のせいでファスナーが閉じなくて…」

アルバート「まだ成長してんのかけしからん！」

アリサ「少し黙っててください」

アルバード「はい。…あるえ？」

アリサ「いつから私を意識してましたか」

アルバード「最初は原隊復帰のあと急にしおらしくなつて一緒に行動してたとき、本気になったのがロシアに戻ると言い出した時。さつきから口が勝手にいい！」

アリサ「だからあの時『行かないで欲しい』って素直に言つたんですね」

アルバード「こーろーせーよー！」

アリサ「まだ吐いてもらいますよ。リーダーのいない間、私が誰かと交際していたと思つたのはなぜですか？」

アルバード「だつてモテそうじゃん」

アリサ「そうですか？」

アルバード「お前が信頼取り戻すと同時に人気が上がったんだよ、ソーマもか。コウ

夕は知らね」

アリサ「じゃあ、これで最後にします。アルバードはアリサ・イリーニチナ・アミーエーラをどうしたいですか？」

アルバード「俺のすべてをお前にやるから、お前のすべてを俺にくれ」

アリサ「プロポーズ…ですか？」

アルバード「ああ、薬の所為じゃなくて俺の本心だ。効果もう切れてるし」

アリサ「え」

アルバード「あの薬な、前にリツカの実験台になったとき何回か打たれてな、打つたびに効果時間が短くなったんだよ。ぶっちゃけもう効かないと思ってた」

アリサ「なら、本気で…？」

アルバード「当たり前前だろ。言っとくけどな、俺はお前が思っている以上に重いしお前のこと大好きだからな」

アリサ「聞き捨てなりませんね、私の方が好きですよ」

アルバード「はあ？俺なんて今すぐお前を抱きしめてやりたいって思ってるからな」

アリサ「私なんてリーダーにナニされても受け入れる所存ですよ」

アルバード「だったら今すぐ…!!」

アナグラ内放送「緊急事態発生！支部内の神機使いは直ちに出勤を願います！」

アルバード「…」

アリサ「…」

アルバード・アリサ「…あははははは！」

この日、極東支部に中規模で侵攻してきたアラガミの群れは装甲壁に触れさせることなく全滅

しばらく神機使いの間で『番（つがい）の鬼神』という通り名が有名になった

同日、放送室ジャックした馬鹿が交際を宣言、極東支部公認のバカップルが生まれた

放送を聞いたものは全員思ったそうだと

『むしろまだ付き合ってたのか』と

第8話 恋人の時間

アルバード「アリサ、デートしようぜ」

アリサ「…」

アルバード「いや、特務じゃなくて」

アリサ「…?」

アルバード「熱は無いから額に手を当てるな」

アリサ「リーダー」

アルバード「なんだ」

アリサ「書類仕事（現実）から目を背けないでください」

アルバード「いけずう」

タツミ「ヒバリちゃん！俺もあれやりたい！だからデートしよう！」

ヒバリ「考えなくもないのでミッション行ってきてくださいね」

タツミ「いけずう」

アルバード「よし、終わった！」

アリサ「:はい、大丈夫そうですね。お疲れ様です」

アルバード「書類仕事なんかより好きに暴れる方が性に合ってるんだけどな」

アリサ「報告書程度で音をあげないでください」

アルバード「お前は定期的に力を抜けよ。聞いたぞ？俺が離れてる時にぶっ倒れたら
しいな、しかも無理が祟って」

アリサ「(情報源は)どこですか」

アルバード「親切的な外国人の方だ」

コウタ『H A H A H A ☆』

アリサ(口止めしておいたのに:!)

アリサ「いえ、それ以降はちゃんと休息もとってますから」

アルバード「ふーん:」

アリサ「全然信じてませんね」

アルバード「ま、サテライトやらなんやらで忙しいのは仕方ないでしょう」

アリサ「だから…」

アルバード「恋人の前くらい甘えてもいいじゃねえか？」

アリサ「…素面でそんな恥ずかしいこと言わないでくださいよ」

アルバード「そんなこと言いつつ肩に頭預けてくるアリサ、マジデレ期」

アリサ「甘えてもいいんでしょう？」

アルバード「そうなんだけど、ひとつ忘れてた」

アリサ「はい？」

アルバード「ここラウンジだった」

アリサ「…」

後輩A「やばい砂糖吐きそう」

後輩B「アリサさんのデレパナいつす」

後輩C「私もあんな彼氏欲しい…」

コウタ「はいみんな、バカップルが桃色空間作ってるから気をつけてね」

リンドウ「いやあ、若いっていいな」

アリサ「…!!!」

アルバード「いや、その、なんだ、部屋戻る？」

アリサ「…はい」

スバル「あつちも大変だなあ」

シルフィ「お兄ちゃん！私とイチャイチャしましょう」

シエル「駄目です、隊長は私とその、い…イチャイチャするんです！」

スバル（顔真っ赤にして恥ずかしがってるシエル、尊い）

シルフィ「私は認めませんよ、お兄ちゃんを下半身を満足させられるのは私だけなんです」

シエル「…?」

スバル「んー、ちよつと教育上よろしくないから黙ろうか愚妹」

シルフィ「お兄ちゃん、知識も無いような人で妹にしか興奮しない特殊性癖持ちの絶倫お兄ちゃんが満足するわけありません！」

スバル「やめて！いわれのない認識が周りに広がってる！ヒソヒソ話が聞こえてくる

！」

シエル「ちよつと勉強してきます！」

スバル「ええええ！ちよつと待つて！さつきからなんなのこの流れ！これイチャイチャして終わる話じゃなかったの!?!」

シエル「安心してください、隊長！明日までには君を満足させられるよう勉強してきます！」

スバル「ホントにやめてえ！純粋なままのシエルでいて！つて、もう行っちゃったし！」

シルフィ「さあ、私と蜜月な情事を……！」

スバル「当て身！」

シルフィ「あふん！」

スバル「まだあわあわ展開あわわ」

部屋に向かったが部屋に入れてもらえず

次の日からシエルが顔を見るなり顔を真っ赤にして顔を背けたり、会話が上手く成立

しないといった事案が3日ほど続いた

その後二組のカップルは無事卒業式（意味深）を終えたとき

夏の特別編

アルバード「夏だ！」

スバル「水着だ！」

シルフィ「お兄ちゃん…」

バカ「海だー！」

アルバード「これは期待してもいいんでないでしょうかスバル君」

スバル「期待で膨らんでますねアルバードさん」

バカ's「主に胸が」

アリサ「リーダーとスバルさんが暑さにやられてしまったみたいです…」

アルバード「安心しろアリサ、お前に關しては普段の格好と大差無いからそんな期待してな…やめて、無言で拳振り上げないで！俺が悪かった！正直興奮して…痛い！」

ナナ「今のほとんど自分から行ったよね」

エリナ「ていうかここ海じゃなくて湖ですよね」

スバル「二人とも水着似合ってるね」

ナナ「えへへ、ありがとう」

エリナ「そ、そんなことより！…いいんですか？ 私たち聖域で遊んでて」

スバル「シリアス是他所様にぶん投げるのがうちのスタンスなので」

エリナ「わあ身も蓋もない」

ナナ「シエルちゃん！いつまで隠れてるのー？」

スバル「シエルが、水…着？」

スバルは知った

如何に自分の想像力が貧困であつたかを

スバル「白い肌だからこそ際立つ黒ビキニ、揺れた…！（喀血）」

エリナ「ここまで対応が違うと腹が立つてきますね」

ナナ「いやあ、でもシエルちゃん露出多めはかなりレアだよ？」

ギルバート「ハルさんなんで泣いてるんすか？」

ハルオミ「生きててよかった」

アルバード「それな」

スバル「ほんとそれ」

ナナ「あ、復活した」

コウタ「おーい」

リツカ「お待たせー」

アルバード「おう、来たか」

リツカ「はいこれ、頼まれてたヤツ」

アルバード「さんきゅ。水着、似合ってたんじゃん」

リツカ「おだてたつてなんも出ないよ？」

アルバード「ははは、ただ本音だよ」

アリス「…へー、ふーん」

コウタ「アリスがすげえ形相でこっち睨んでんだけど…」
スバル「ところでこれなに？」

アルバード「ノルンのデータから引つ張ってきた水鉄砲だ、空気圧で飛ばすやつ」

リツカ「人数分作ってきたよ、流石に疲れたけど」

アルバード「お疲れさん、ご褒美に撫でてあげよう」

リツカ「うむ、よきにはからえ」

エリナ「しばらくの期間見てたけど2人の関係がわからない…」

アリサ「……………」

コウタ「なんかアリサの背後に阿修羅みたいなのが見えるんだけど」

スバル「なるほど、こうやって褒めるのがいいんだ…。実践してくる！」

ナナ「今までのやり取りで何を学んだの？」

スバル「シエル！水着すごく似合ってるよ！」

シエル「あ、ありがとうございます」

スバル「なんかもうシエルかわいいよシエル」

シエル「は、はい!？」

スバル「俺のシエルかわいい！」

シエル「あの…」

スバル「シエルかわいい！」

シエル「／／／」

ロミオ「イジメかつ！」

レヴィ「なんだろうな、このグダグダ感」

アルバード「ネタが無いんだよきつと」

アリサ「えい」

アルバード「ぶはっ！」

アリサ「あ、これ結構楽しいですね」

アルバード「鼻に水が…」

アリサ「もつと圧を上げれば、えい」

アルバード「あふん！」

リツカ「君の注文通り圧力高めだからノックバックに気をつけてねー、そりゃ」

アルバード「あ、ちょ、やめ…！」

アリサ「流石に気分が高揚します」
アルバード「俺が悪かった！アリサーー！」

きつとひと夏の楽しい思い出

エリナルート

エリナ編 第1話

アルバード「墓参りに付き合って欲しい？」

エリナ「うん」

アルバード「あー…あれだよな、随分前に寺の辺りいったやつだよな？」

エリナ「覚えてたんだ？」

アルバード「まあ、な。なんだ保護者同伴じゃないと駄目なのか？」

エリナ「ちよ…子供扱いしないでよ！」

アルバード「はいはい、それでなんかあるんだろ？俺のどこに来るってことは」

エリナ「あ、うん。近くにちよつと強いアラガミが縄張り争いみたいのをしてて、一人じゃ駄目って言われて」

アルバード「あいつはどうした、同期のほら…あの助走をつけて全力で顔面ぶん殴りたくなるようなやつ」

スバル（わかるわ）↑任務中

アルバード（あいつ直接脳内に…！）

エリナ「エミールのこと？あいつは任務中、いたとしても駄目。騒がしいから」
アルバード「俺騒いじやうかもよ」

エリナ「そうだともおおじ…あなたは強いんでしょ？」

アルバード「今おおじさんって言いかけたな」

エリナ「…気のせいでしょ」

アルバード「おおじさんと呼ばれるくらいならグラサンって呼ばれたい」

エリナ「うわなにその願望、うまいこと言ったつもり？」

アルバード「ちよつと引かないで」

エリナ「それで、ついて来てくれるの？くれないの？」

アルバード「上目遣いで可愛くオネダリしてくれたらいいだろう」

エリナ「ドン引きです…」

アルバード「他人のネタを持ち出すなわかったよ行くよ。暇なのでな」

アルバード「はい、やってまいりました寺院です」

エリナ「足滑らして、ドリフみたいに転んだのを誤魔化しても無駄だよ」

アルバード「ああ、だが良いものを見れた」

エリナ「フン！」

アルバード「イツ→タイ←メガアアアア→!!!」

エリナ「この変態！スカート覗くな！」

アルバード「いやあ色々手遅れだろ、アリサのファスナー並に。戦闘中チラチラ見えるし」

エリナ「…」

アルバード「すまん、謝る、だから無言で神機振り上げるの止めて」

エリナ「ほらふざけてないで、行くよ」

アルバード「いんや、向こうさんからおいでなすった」

エリナ「え？」

アルバード「ハガンコンゴウさんです」

ハガンさん「…」ヨッ

エリナ「もしかして…」

アルバード「さつき騒いでたのが原因です。雷撃くるぞ避ける！」

エリナ「うわっ！」

アルバード「じゃあ、実地演習と行こうか。もう一匹が来る前に倒すぞ」

エリナ「…やっつと、この人の戦いが見られる」

戦闘終了

エリナ（ズルい）

なんのことかな？

アルバード「さて、これで落ち着いて墓参りが出来るな」

エリナ「むー…」

アルバード「やだかわいい、膨れちゃって」

エリナ「茶化さないでください」

アルバード「はっはっは」

エリナ「もう…！」

エリナ（エリック、私頑張るね。絶対に世界を——）

アルバード（上…エリック、とりあえず妹は任せとけ、お前の代わりに——）

（華麗に守ってみせるよ）

第2話

i nラウンジ

アルバード「…」

エリナ「な…何ですか？」

アルバード「前から思ってたんだ、なんで敬語？」

エリナ「まあ、私も良識のある大人ですし？ 目上の人には敬語くらい使いますよ」

アルバード「お前のはむず痒い、タメで話せ」

エリナ「地味に傷つくなあ…、わかったこれでいい？ おじ…アルバードさん」

アルバード「もしかして口調崩すと昔みたくおじさんって言いそうになるのか？」

エリナ「う…つい流れで」

アルバード「昔みたいでいいのに」

エリナ「だって、おじさんって呼ばれるのいやなんでしょ？」

アルバード「ソルナコトナイヨ」

エリナ「おじさん」

アルバード「うっ…」

エリナ「おっさん」

アルバード「うう…エリナが、エリナがいじめる。22はおっさんじゃないもん、お兄ちゃん悲しい」

エリナ「だれがお兄ちゃんだ」

アルバード「ふん、所詮ちびっ子には大人の魅力は理解できんよの」

エリナ「ちっちゃくないし大人だし」

アルバード「ははは、アリサくらい実ってから言うんだな。あいつはお前くらいの歳でもうあんなだったぞ」

エリナ「あの人発育よすぎないですか？」

アルバード「そうだな、ノルンのデータベース見るまで年上だと思ってた」

エリナ「ていうか、どこ見てんですか変態」

アルバード「無いから見たことにはならない」

エリナ「転がされたいですか？」

アルバード「おお、こわいこわい。これでも飲んで機嫌を直せ」

エリナ「何ですかこれ：『失恋フレーバー』？」

アルバード「まあ、飲んでみる美味いから」

エリナ「…まあ、折角のご好意だし。いただきます」

アルバード「ワクワク」

エリナ「…?…!!…!!??」

アルバード「はい水」

エリナ「んくんく…ぷはあ!…ケホツケホツ!」

アルバード「どんな味だった？」

エリナ「ドロドロのとした液体と炭酸の刺激が口を侵食したあと強過ぎる甘酸っぱさ

広がっていつて突如として現れた苦味に口内を支配されました…うええ、気持ち悪い」

アルバード「お前食レポの素質あるんじゃないか？」

エリナ「ふー…とりあえず、頭にきました」

アルバード「ばいびー」

エリナ「逃げんな！」

from ペイラー・サカキ

第一弾『初恋ジュース』から早四年

構想と改良を加えた『失恋フレバー』発売決定です

後日

エリナ「…」

アルバード「なあなあ」

エリナ「…ツーン」

アルバード「機嫌直してくれよー、俺が悪かった！何でもするから許してくれよ！な
？」

ん？

エリナ「ん？今ー」

「何でもするって言ったよね？」

アルバード「あっ…」

この後買い物の約束を取り付けられるという平和な交渉に終わった

ただし

1 日絶対服従という条件付きで

第3話 泣きっ面に蹴り

エリナ編 第3話

買い物前夜エリナside

エリナ（ヒバリさんに2人分の有給申請したらなぜか感謝された…）

ヒバリ『あの人、悪い時は有給を使わないんですよ』

エリナ（つて言つてたけど）

エリナ（ふふふ、明日は今までからかつてくれた分こき使つてやるんだから！…どんな服着てこうかな？）

エリナ「…」

エリナ「いやいやいや、デートじゃないんだから！ただちよつと待ち合わせして買い物したりお昼ご飯食べたり…手とか繋いだり／＼／＼」

エリナ「…ちつがーう！ああもう、寝よ！」

エリナ「…眠れない」

アルバードside

アルバード「あー…明日大丈夫かねー？そうだ、残金確認してからさっさと寝ようそ
うしよう。寝坊で遅刻とかなんて言われるかわからん」

アルバード「えーと、ひーふーみー…あ、大丈夫そうだな。寝よ」

翌日

エリナ「ごめんなさい！待った？」

アルバード「二時かなーうんにや？今来たところ」

エリナ「ホントにごめんなさい…」

アルバード「まあ、気にするな。気にしてないから」

エリナ「怒ってない？」

アルバード「怒ってない」

エリナ「ホントに？」

アルバード「…」

エリナ「やっぱり怒ってるじゃない！」

アルバード「いやいや、今日はエリナお嬢様の言うこと聞く下僕ですから、はい」

エリナ「わかった！なんでも言うこと聞かなくていいからこれだけは言わせて？」

アルバード「ん？」

エリナ「サングラスだけは取って」

アルバード「ふっ…これを外す事は、人前でパンツを脱ぐことに等しい」

エリナ「もしもし警察ですか」

アルバード「あのすんませんまち勘弁してください」

エリナ「じゃあ、サングラス取ってください」

アルバード「わ…わかったよう。ほら、これでいいんだろ」

エリナ「…やっぱり綺麗な目、してるね」

アルバード「あー、前に見せたっけか。なんでそんな素面にこだわるん?」

エリナ「だってせっかくのデート（小声）なのに顔が見えないとか…」

アルバード「ん？すまんよく聞こえん」

エリナ「なんでもない！ほら、行こっ」

アルバード「しかし何年か留守にしてたが結構変わったな」

エリナ「随分活気づいたよね。あ、その小物屋さん寄るね」

アルバード「おう…つと、すまない」

「あ、すみません」

アルバード「…ん？」

「えっと、なんですか？」

アルバード「ああいや、人違いならいいんだが…ノゾミちゃん？」

ノゾミ「えっと、誰ですか？」

アルバード「ん、ああそうか。グラサングラサン…ほら俺、コウタの同期のアルバード」

ノゾミ「うそ!?!ほんとにアルバードさんなの？」

エリナ「サングラスで判断されるって…」.

アルバード「さすおれ」

エリナ「…本人がいいならいいんだけどさ」

ノゾミ「もしかして、デート中でした？」

アルバード「ん、まあそんなところ」

ノゾミ「邪魔しちや悪いですし、行きますね。 今度家に来てね？」

アルバード「おう、またな」

アルバード「どつたん？にやけた面して」

エリナ「な…なんでもない！」

アルバード「そうか、ならさっさと買い物済ませようぜ」

特に何も無くデート終了

エリナ「やる気の無さに憤慨」

アルバード「エリナ様はお怒りだ」

おいかりならしかたない

トラップカードオープン（にわか）

アルバード「あ、音近いな」

エリナ「え？」

アルバード「エリナ、先帰れ」

エリナ「ちよ、待ってよ」

アルバード「こっちか…」

エリナ「もうっ！なんなの!？」

アルバード「この壁か」

エリナ「こんな人気の少ないところで何するの?」

アルバード「帰れっていったよな?」

エリナ「そんなこと言って私にランボーするつもりでしょう?スタ○ーンみたいに

！」

アルバード「無理矢理ついてきた上にネタをぶっこむな」

エリナ「ネタ？ちよつと何言ってるかわからない」

アルバード「訴訟も辞さない」

エリナ「憲兵さん、このおじさんに口にするには憚れるような厭らしいことされました！」

アルバード「エリナ様、どうか気をお鎮めください」

エリナ「せめてなんでこんなところ来たか教えてよ」

アルバード「わかったよ。あそこに対アラガミ装甲壁があるじゃろ？」

エリナ「うん」

アルバード「あれが…」

バアン！ガラガラー！（崩壊の音）

アルバード「ああじゃ」

エリナ「ええー!?!」

アルバード「あそこちよつと老朽化しててな、それがほらたまたまここまで来れたウコンバサラがダウン！つてことよ」

エリナ「大変じゃないですか！」

アルバード「だなー。あ、ヒバリ嬢？防衛班と俺の神機頼める？今壁突破されたじゃん？そこにいるからさ…なんか不機嫌だな？え？アツハイごめんなさい…。はい、はい、お願いします。

あと10分で防衛班来るって（ω・ω・ω）」

エリナ（何言われたんだろう）

アルバード「さあて、時間稼ぎでもするか」

小石を拾い上げ

アルバード選手大きく振りかぶって…

アルバード「うりやさ！」

ウコンバサラがアルバードへと注意を向ける

アルバード「とりあえずお前は近隣がパニック起きてないか見てこい」

エリナ「一人で戦うつもり!？」

アルバード「戦いじゃない、逃げるだけだ」

踵を返し小石をぶつけ続けながら壁の穴へと走っていく

ウコンバサラはそれを追っていく

壁の外へと走っていき一間を置いてから強烈な破裂音が響く

エリナ「スタングレネード…？」

雷撃、轟音、地響きを繰り返し聞こえてくる

エリナ「一体何を…」

壁の外、そこには理解するのに時間がかかる光景が広がっていた

雷撃を交わしていくアルバード

飛んでくる雷光をかいくぐる

ここままでまだまとも

距離を詰めてから

こともあろうかウコンバサラの尾を掴み

地面に叩きつける

これを繰り返していた

エリナ（どうしてだろう、あんなに見たかった戦闘描写なのに圧倒的コレジャナイ感
…）

そして防衛班到着

タツミ「おおい！つて、あれあんま荒れてないな」

エリナ「タツミさん！今外でアルバードさんが戦つて」

タツミ「ああ、あいつまたやってるのか。若いねえ」

エリナ「ええ…（困惑）」

カノン「す、すみません遅れました。アルバードさんの神機持つてきました」

タツミ「ボタンタッチしてくるわ」

アルバード「ラッシャイヤセー！」

タツミ「やる気まんまん殺気ムンムン」

アルバード「泣くまでやろう殴り合い」

タツミ「お疲れさん、代わるぜ」

エリナ「今の何!?!」

アルバード「さんくす、任せた。周りに小型は無し」

タツミ「あ、神機いらなかったか?」

アルバード「まあ、保険だったし」

タツミ「うし、後は任せろ」

アルバード「流石実家のような安心感」

カノン「私も頑張りますね！」

アルバード「野宿のような不安」

カノン「ヒドイ」

アルバード「おいエリナ帰るぞ」

エリナ「あ、はい！」

土埃に塗れたその背中はいつもより大きく見えた気がしたエリナだった

このあとヒバリに休日労働したことをついて小一時間説教された

ハロウィン特別編

アルバード「トリーツクオア…」

スバル「トリートメント！」

アルバード「馬鹿野郎☆」

スバル「間違えちゃいました、てへっ☆」

シルフィ「いい！いいですよ！きゃー！こっちむいてー!! (激写)」

スバル「ハロウィンだねアルバードさん！」

シルフィ「放置プレイですねゾクゾクします！」

アルバード「じゃあ早速いたずら…菓子集りにいこうぜ」

スバル「ごーごー」

アルバード side アリサ

アルバード（吸血鬼コス）「アリサー」

アリサ「はいはいお菓子なら」

アルバード「……TRICK！」

アリサ「…はい？」

アルバード「いたずらさせろ」

アリサ「リーダー…」

アルバード「おいおい、腕で体をガードしながら侮蔑の視線を向けるな俺は正常だ」

アリサ「にじり寄らないでください通報しますよ？」

アルバード「わかったじゃあ妥協案でいこう、はいこれ」

アリサ「リップクリーム、ですか？」

アルバード「まあ、普通に使ってみてくれ」

アリサ「媚薬とか」

アルバード「ないです」

アリサ「…あれ、これ甘い？」

アルバード「チョコレート製なので」

アリサ「ほら塗りましたよ、お菓子渡すのでさっさ帰ってください」

アルバード「ピリピリしてんな、女の子の日か？」

アリサ「…」

アルバード「あ、グーはやめよう？痛いからさ、シヤレにならない…っしょい！」

アリサ「避けないでくださいよ」

アルバード「なぜそんなお怒りに!?あ、俺のせいか」

アリサ「ハロウインだからって浮れてないで仕事してください」

アルバード「トリックオアトリートって普通に言っても付き合ってくれない？」

アリサ「最初からそう言えば普通に対応してたんです」

アルバード「じゃあ、お菓子をイタダキマス」

アリサ「はいはい、ほらー」

あきれた様子で溜息混じりに目を閉じた刹那

アリサ「んん!?んちゆ、まつ、ん、んんくく!!!」ズキユウウウウウウウン!

アルバード「つぶは、ゴチ」

アリサ「チョコレートのリップにしたのはこれが目的ですか!」

アルバード「いえす!甘くて美味しかったです!」

アリサ「そういう恥ずかしいこと大声で叫ばないでください!」

アルバード「ええいうるせえ☆今夜は寝かさないZ E ☆」

アリサ「うわ、なにをして、やめ…!」

このあと滅茶苦茶ry

スバル side シエル

スバル（マミーコス）「トリックオアトリート！」

シエル「はい、お菓子です」

スバル「わーい」

シエル「あの…」

スバル「ん？なに？」

シエル「トリック…もし、イタズラをするならどんなことをしましたか？」

スバル「んー…」↑考えてなかった

スバル「お菓子の代わりに…いやダメだネタが被る」

シエル「ネタ？」

スバル「ああいやこつちの話」

スバル「そうだ、逆にシエルはどんなイタズラしてみたい？」

シエル「…そうですね、目を瞑ってくださいますか？」

スバル「ん、なになに」

かちちゃん

スバル「目を瞑り、真つ暗な中、両手優しくを取られ、金属音になる…ああ、最後がなければロマンティック☆」

シエル「目を開けていいですよ」

スバル『「かちちゃん」のあたりで目を開けなかった自分を褒めたい」

シエル「ふふふ」

スバル「シエルさん！ハイライトさんが！ハイライトさんが!!」

シエル「慌ててる君は…とても可愛らしいですね。このまま君を閉じ込めてしまえば君を独り占めできるでしょうか…君が他の女性と楽しそうに会話するところを見て嫉妬する必要もなくなります。私だけを見ていてください。私も君しか見ていません。君になら何をされてもいいんです。私の身体を好きにしているのは君だけなんです。髪も目も耳も唇も首筋も胸も胴も脚も血も骨も臓物も命だって君の望むがままです。だから、私だけのものになってください。君だけのものにしてください。他に何もいません。君の寵愛だけが私を全てが満たしてくれるんです。君の優しい微笑みが好きです。私を撫でてくれる手が好きです。愛を囁いてくれる声が好きです。力強く抱きしめてくれる腕が好きです。君がここにいる証を刻んでくれる鼓動が好きです。一番に私を心配してくれる気遣いが好きです。安らぎをくれる匂いが好きです。私のち…」

スバル「わー！わー！わー！」

シエル「どうかしましたか？」

スバル「ハイライトさんを戻してください」

シエル「あ、これコンタクトです」

スバル「えっ…?」

シエル「あとはこれを出せば…」

看板『ドツキリ大成功』

スバル「…仕掛け人はアルバードさんとリツカさんだね?」

シエル「いえ、その、違います?」

スバル「あの2人はあ!!」

シエル「あの…隊長」

スバル「ん？」

シエル「好きっていうのはドッキリじゃないです…」

スバル「…そんなこと言われたら怒る気がなくなるじゃないか」

アルバードside エリナ

アルバード「エリナ…トリックオアトリートしないの？お兄さんうえるかむよ？」

エリナ「嫌な予感しかしないから却下」

アルバード「トリックオアトリート…」

エリナ「はいお菓子」

アルバード「レーションで…！レーションでお前…！！」

エリナ「贅沢言わない」

アルバード「冷めきっている、まるで倦怠期の夫婦のように冷めきっている…！！」

エリナ「だだだだ誰が夫婦か！！」

アルバード「だつてさ」

エリナ「何よ」

アルバード「俺がラウンジ来てからずっと膝の上に座ってるじゃん」

エリナ「？」

アルバード「え、ビックリだわ、そこで可愛らしく疑問符浮かべちゃうところビックリだわ」

エリナ「そろそろパパになるんだからしっかりしてよね」

アルバード「え？」

エリナ「え？」

アルバード「え？」

エリナ「え？」

アルバード「俺の知らない間に薬指に指輪が、コレあれじゃねエンゲージリングじゃね、うそこれやだこれ」

エリナ「まだ寝惚けてるの？」

アルバード「あー、エリナは俺の嫁。おーけー？」

エリナ「だからそんな恥ずかしい事言わないでよ。まだふ…夫婦とか、嫁とか慣れないんだから」

アルバード（年齢と体格差的に俺犯罪者ー！！）

エリナ「昨日だって、その…後ろだなんて…／／／」

アルバード「あー！あー！聞こえない！」

エリナ「付き合ってから獣のように求めてくるから…すぐデキちゃったし」

アルバード「」

アルバード「うわああああおああ!!」

アルバード「おんざベッド、誰も潜り込んでない、よかつた夢かあ……!」

夢オチでした

共通side カノン

アルバード「カノン！」

スバル「カノンさーん！」

カノン「あ、トリートなら…」

アルバード・スバル「トリートとかいいんで誤射減らしてくださいいいいい!!!」土下座ア

カノン「えええええええ!!??」

タツミsideヒバ…

カノン「え？私の出番これだけですか!？」

あつち行きなさい

カノン「そんなひどい！」

タツミside ヒバリ

タツミ「ヒバリちゃん！デートオアトリック！」

アルバード「やるなタツミ！ハロウィンを利用して違う手口に走るとは」

スバル「これはヒバリさんどうでる!？」

ヒバリ「じゃあ、イタズラしていいですよ」

アルバード「またしても玉砕したあ！」

スバル「これ考え方によってはいつもよりストレートに断られてないですかね!？」

アルバード「だが諦めるなタツミ！イタズラをするチャンスだ！」

タツミ「…あ、う」

アルバード「…」ゴクリ

スバル「…」ゴクリ

タツミ「ヒバリちゃんにイタズラなんて出来ねえよおおおおお!!」

スバル「あ、逃げた」

アルバード「彼是我々が考えているよりピユアだったんだ…」

スバル「ピユア過ぎるよタツミさん…!」

ヒバリ「…ふう」

フラン「ふふっ…」

ヒバリ「なんですかフランさん？」

フラン「いいえ、なんでもありませんよ？」

ヒバリ「…そう、ですか」

フラン（タツミさんが駆け寄って来る時の自分の表情、気付いてないんでしょよね）

アルバード・スバル「タツヒバはやはり正義であつた」

第4話 欲しいもの

最近の私は少し変だ

気が付けばあの人を目で追っている

サングラスのせいで分かりづらい表情もだんだんわかってきた

一緒にミッションにも慣れてきた

少し…セクハラはあるけど

そこから少しずつわかってきた事がある

あの人は私から一歩引いた位置で接している

じゃれつく様な態度を取っていても

ちよつとセクハラまがいの発言をしてきても

傷つけないようにとフォローを入れたりしている事

ここまでなら気心知れた友人なら普通かもしれない

あの人のそれは違和感を感じる

身に覚えのある違和感

どこかもどかしい感じがする違和感

身に覚えのある感覚…先輩、は違う

けれど先輩が絡んでいたような…

そうだ…もしかしたら

でも、どうして…

どうしてあの人がソーマさんと同じ気遣いをするのだろうか？

やり方は違う、ミッションをアサインされた事は無かった

過剰に後方にまわりしたりはしない

隠していた？

私に悟られないように？

もしかしたらまだ私は子供扱いされているのではないだろうか？

…されている気がする

けれど、あれはソーマさんとは違う

ソーマさんが感じていた自責の念

あの人にもそれがある…？

もしかすると…

ノルンのデータベースから過去のミッションの記録を検索する

四年前のあの日

ミッション『鉄の雨』

メンバー、ソーマ・シツクザール

エリツク・デアーフオーゲルヴァイデ

…アルバード

あの人の名前があつた

エリナ（あの人一度でもそんな素振りを見せたことがあったかな…）

アルバード「エーリナ、何難しい顔してるんだ？」

エリナ（会って間もない頃、特にエリックのことで沈んでる時期によく相手をしてく

れた…と思う)

アルバード「お？無視か？いいだろう、お前が相手をしてくれるまで…回ります！」

エリック（記憶が正しければあの時知らない素振りを見せた気がする。うん、エリックってどんなやつ？って聞かれた気がする）

アルバード「やっべ、すげー楽しい！いいの!?こんな楽しくていいの!?法則的に大丈夫!?ほんとすっげー、すっげー飽きた」

エリナ（その後もなんか色々話したり奢らせたりして…兄代わりって感じだったかな）

アルバード「あー…回り過ぎて吐きそう。エリナ、アルバードさん寂しい。寂しくて泣いちゃいそう」

エリナ（罪滅ぼしのつもりだったのかな…）

アルバード「おーい、いいかげん返事しないとスカートの中身覗いちゃうぞー。ミツシヨン中何回か見えたことあるのは内緒だ（キリッ）」

エリナ（私と一緒にいてくれるのも…）

アルバード「お？泣くぞ？アルバードさん泣いちゃうからな？」

エリナ（そもそも私はあの人にとってのなんだろう）

アルバード「カルビ、聞いてくれよ。エリナに無視されるんだ…」

カルビ「キュル？」

エリナ（ああもう！なんで私こんなに悩んでるの!?!）

アルバード「お前も悩みがあれば聞くよ。え？カゴが狭い？せやな」

エリナ「こうなったら、縛り上げて洗いざらい吐かせてやる！」

アルバード「エリナ様がご乱心だ」

カルビ「ご乱心ならしやうがない」

アルバード「ふあっ!？」

カルビ「キュル？」

アルバード「気のせいか、驚かせやがって」

エリナ「そこのグラサン!こっちに来なさい!」

アルバード「や、やめて!私のを引きずって…ランボーしないで!」

エリナ「キヤーキヤー喚かないでください！生娘じゃあるまいし」

アルバード「たーすーけーてー」

I n
エリナの部屋

アルバード「誰かー！男の人呼んでー！」

エリナ「いいから、静かにしてください」

アルバード「うう…縛られて動けないところを襲われて私の初めてを…きやつ♡」

エリナ「たあっ！」

アルバード「痛いっ！」

エリナ「今から質問をします。もし、真面目に答えなかった場合はアリサさんにあなたに襲われたと訴えます」

アルバード「答えます！真面目に答えます！ピターさんの餌は嫌です！」

エリナ「鉄の雨」

アルバード「！」

エリナ「やっぱり覚えてるんだね、エリックが亡くなったミッション」

アルバード「調べちゃったか…」

エリナ「どうして知らないフリしてたの？」

アルバード「面倒を増やしたくなかったって言えば信じる？」

エリナ「そんなの…でも、そっか」

エリナ「あなたが同行してたと知ってたら、当時の私はきつと拒絶してたと思う」

アルバード「まあ、性格的に落ち着いてから話そうかなとは思ってたんだぜ？」

エリナ「まだ落ち着いてない？」

アルバード「少し感情的かな」

エリナ「…否定はできないけどさ」

アルバード「あー、まあいいだろ。知っちゃまったんならしょうがない、スリーサイズ以外ならなんでも答えてやるよ」

エリナ「じゃあ、聞くね」

アルバード「あ、スルーですかそうですね」

エリナ「私のこと好き？」

アルバード「」

エリナ「好き？」

アルバード「ごめん、最初の質問がよりにもよってソレ？」

エリナ「だって泣いてる私慰めたり、話し相手になったり、勉強見てくれたりしたのは何も責任感だけじゃないでしょ？」

アルバード「いや、そうだけどさ」

エリナ「つまりそこには好意があると」

アルバード「まあ、間違っではないな」

エリナ「じゃあ私のこと好きなんだ？」

アルバード「嫌いか好きかで言えば好きだよ、はい」

エリナ「ふーん、そうなんだ…私のこと好きなんだ、ふーん」

アルバード「な、なにさ」

エリナ「ロリコン」

アルバード「ヤメテ！」

エリナ「四年前の幼気な私をヤラシイ目で見てたんだ」

アルバード「なぜそうなる」

エリナ「ま、ロリコンだったんだし仕方ないよね？」

アルバード「待て俺はロリコンじゃない」

エリナ「でもロリコンのくせに約束破ってどっか行っちゃやうような人だもんね。ロリコン以前に最低だよね」

アルバード「意外と根に持ってんな！」

エリナ「やだな全然根に持ってなんかいませんよ、最低ロリコン野郎」

アルバード「もうアルのライフはゼロよ！」

エリナ「言いたいことがあるよね？」

アルバード「大変申し訳ございませんでした」

エリナ「ん？」

アルバード「え、だから申し訳ございませんでしたって」

エリナ「私が聞きたい言葉が聞こえないなー？」

アルバード「え？」

エリナ「質問に答えて欲しいなー」

アルバード「」

アルバード「エリックの事で泣いてるお前を放って置けなかったんだよ！妹が出来た

みたいでうれしかったよ！久しぶりに会って可愛くなったよ！お前といると楽しいよ！何言ってるかわからなくなってきたよ！好きだバーカ！これでいいか!？」

エリナ「ホントに好き？」

アルバード「ああ、好きだよ！」

ああ—— やつと納得できた

エリナ「好き？」

アルバード「好きだ！」

欲しかったのは謝罪の言葉でも後悔の言葉や懺悔でもない

エリナ「もっと、言って」

アルバード「好きだよ！」

私はきつとこれが欲しかった

エリナ「もつと……！」

アルバード「好きだ、大好きだ！」

この人にとって欲しかった

エリナ「もっともっと…!!」

アルバード「好きだ大好きだ愛してる!!」

だから伝えたい……！

エリナ「…っ!!」

アルバード「っと、いきなり抱きついてどうし…」

私もあなたのことか
——

エリナ「大好き！」

クリスマス特別編2

アルバード「トップバッターはこの俺」

スバル「へいへいピッチャービビってる」

アルバード「勝負だ花形」

スバル「誰だ」

アルバード「とりあえず行ってくるわ」

スバル「いってらー」

アルバード「アリサあ！恋人になって初めてのクリスマスだぜ！」

アリサ「色々と恥ずかしいので静かにしててください」

アルバード「今年は歌わなくて済むんだよな、恋人と過ごさからな！」

アリサ「あー…それなんです」

アルバード「クリスマスにはチキンだよな！」

アリサ 「その日クレイドルの仕事でいいです」

アルバード 「…」

アリサ 「…」

アルバード 「(; ω ;) ブワッ」

アリサ「!?」

アルバード「うおおおん！」

アリサ「落ち着いてくださいリーダー！普通のご飯を滅茶苦茶美味しそうに食べる人みたいな泣き方になってます！」

アルバード「だって…だって…！」

アリサ「それにリーダーにもそろそろー」

館内放送『アルバード大尉、支部長がお呼びです。至急、支部長室までお越しください。繰り返ししますー』

アルバード「」

アルバード「で、実は俺に用なんてなくてイタズラ電話並みの遊び心で呼んじやっただけなんだろう？」

サカキ「なんだか喋り方が刺々しいけど何かあったのかい」

アルバード「風邪気味なんで床に伏します」

サカキ「とても興味深いね、リツカ君に付きっきりの看病をお願いしようか」

アルバード「さあ、仕事の話をしようか（キリツ）」

サカキ「そうだね。実はサテライト候補地に行つて来てほしいんだ、遠征だね」

アルバード「」

アルバード「絶望した!!」

スバル「次席、推して参ります。ん…？はい、もしもし」

アルバード（通信）『おい！俺の出番ここまでか!?!』

スバル「あ、後で出番あるそうなんで」

アルバード『マジかよかったわ』

スバル「それじゃ、行きますか」

スバル「今回趣向を変えてみようと思います」

シエル 「はあ…」

スバル 「いつも甘えてる気がするからね。今日はシエルにご奉仕しちやう」

シエル 「ご奉…仕？」

スバル (妄想) 『シエル、はいあーん』

スバル『シエル、膝枕どう？脚、硬くない？』

スバル『添い寝してあげるね、腕枕とか抱き枕にしてもいいよ？両方？ふふつ、欲張りさんめ』

シエル「いい…」

スバル（現実）「シエル？大丈夫？鼻血出てるよ？目が怖いよ？」

シエル「すみません、流石に気分が高揚しました」

スバル「まあ、許容範囲内ならなんでもしてあげる」

ん？

シエル「今なんでもするって言いましたよね？」

スバル「う、うん確かに言ったけど。その言い方されると不安に駆られる」

シエル「大丈夫です。その、それではまずはラウンジに」

i n ラウンジ

スバル「やって参りましたラウンジ」

シエル「その、あーん、というものをしてみたいです」

スバル「シエル、出会った当初はもつとぎこちなかったのに立派に成長して…！よし、今日は目一杯甘やかすぞ!!」

コウタ「ムツミちゃん、コーヒーお願い出来る？ブラックで」

ムツミ「はい、対シヨック姿勢ですね。わかりました」

続けてシエルのおねだり

スバル「大丈夫、俺の脚硬くない？」

シエル「快適です」

スバル「何かしてほしいことある？」

シエル「では、頭を撫でてもらえると…」

スバル「お安い御用さ」

シエル「…カルビがいつも気持ちよさそうにしている理由がわかった気がします」

スバル「お気に召してなにより♪」

続けてのおねシエ！（おねだりシエルちゃん！の略）

スバル「えっと…腕枕、だよねコレ」

シエル「はい」

スバル「近くない？」

シエル「抱き付いてますから」

スバル「どっちかという抱き枕？」

シエル「最高です」

スバル「それは良かった」

シエル「いい匂いがします」

スバル「え、そう？」

シエル「とても落ち着きます」

スバル（俺は柔らかいナニカによってドキドキでふ）

シエル「温かいです…」

スバル（だけど、それ以上に幸せだなあコレ）

シエル「〜♪」

ここからは中継先からお送りします

別次元のアルバードさーん

アルバード「はーい、今とても足が痺れてまーす！」

エリナ「誰に話しかけてるんですか？」

アルバード「別次元の俺から信号をキャッチした」

エリナ「ちょっと何言ってるかわからないですね」

アルバード「着信拒否するともれなくアラガミ化します」

エリナ「なにそれこわい」

アルバード「ところでエリナよ」

エリナ「はい？」

アルバード「そろそろ膝から降りてくんね？」

エリナ「嫌に決まってるじゃないですか♪」

アルバード「ご機嫌だね！エリナちゃん！」

エリナ「本当にそう思いますか？」

アルバード「あ、これ怒ってる！笑顔が、笑顔が怖いもん！」

エリナ「どうして怒ってるかわかりますよね？」

アルバード「先程のあれは事故なんです！」

エリナ「ええ、ええ事故ですね、事故でしたとも。その時に追加アクションを起こさなければね」

解説付き回想開始

エントランスをエリナとアルバードが2人で歩いている時だった

カノン「みなさーん！クッキー焼いたので食べませんか…つと、わわわ！」

バスケットを抱えて来ていたカノンがつかまらずいて転びかけた

アルバード「おっと、大丈夫かよ」

そこを颯爽と片腕を回して抱える形で転倒を食い止めた

ここで問題が発生する

カノン「あ、ありがとうございます。アルバードさん」

アルバード「気をつけろよ先輩」

カノン「それで、あのー…」

アルバード「？」

カノン「胸から手を離していただけると…」

アルバード「」

カノン「？」

アルバード「」

カノン「やんっ…」

その揉み心地は驚嘆を禁じ得ないものであった

確かに柔らかい、それでいて弾力があり沈んだ指が包まれながらも低反発を感じる

世界よこれが日本なのか…！

回想強制終了

エリナ「なぜ揉んだ」

アルバード「…そこに山があつたからだ」

エリナ「それを彼女の前でしますか」

アルバード「(理性を) 守れなかった…!」

エリナ「あなたは本当にどうしようもない人ですね。まあ、そんな人に惚れた私も私
ですが」

アルバード「それでおあいこつてことには…」

エリナ「なにかいいましたか？」

アルバード「あ、いえなんでもないです」

エリナ「そうですね、今晚だけ私の言うことに逆らわなければいいですよ。おあいこつてことでも」

アルバード「う…それで気がすむなら」

エリナ「では他の女の子に発情しなくなるように、私でしか興奮出来ない体に開発し

ましよう」

アルバード「ヒイイ！痛いのは！痛いのはヤダア！」

エリナ「大丈夫です、すぐに私以外のことなにも考えられなくなりますから」

アルバード「あッ…」

アルバード「アーーーーーッッ!!」

正月帰投編

アルバード「さて、年も明けたぜ」

だいぶ前にな

アルバード「そして！帰ってきた！この俺が!!」

コウタ「あ、お疲れー」

アルバード「何週間かぶりだな黄色いの、また聖域でパーティーするののか」

コウタ「おう！お前が行ってたサテライト候補地が安定してそうだから資材の搬入やらで年末忙しかったからさ。帰ってきてから新年会やろうってことになったんだ」

アルバード「苦勞かけるねえ…」

コウタ「それは言わない約束だぜおとつつあん」

アルバード・コウタ「いえーい」

新年会 in 聖域セーフハウス

三味線と尺八の雅な音色を想像しつつお楽しみください

アルバード「えー 遅れまして新年明けましておめでとう御座います」く♪

スバル「去年は様々なd…」

アルバード「尺八止めるな」く♪

スバル「…」く♪

スバル（去年は様々な出来事がありましたね）　♪

全員（こいつ直接脳内に…！）

アルバード「そして今年も色々あるだろう。オンラインとか、新作とか」　♪

スバル（おいバカやめろ）　♪

アルバード「そして今回の新年会はサテライト候補地に関わってる神機使いやそれを支えてくれるアナグラストッフ諸君への労い、今後の職務へ励んでほしいと意味合いがある。長くてすまん、では盃を拝借…」

アルバード「今年もよろしくお願いします！かんぱーい！」

全員「かんぱーい！」

アルバード「疲れた」

リンドウ「おう、ご苦労さん」

アルバード「なんで俺司会」

コウタ「やりたそうな顔してたから」

アルバード「おい待て黄色いの、いつそんな顔した」

コウタ「つてアリサが言ってた」

アルバード「そんな完熟王」

コウタ「誰がバナナだ」

アルバード「お前じゃねえよバナナカラー」

コウタ「なんだよかつ…よくねえよ!？」

アルバード「ところでアリサはどこよ」

コウタ「それならさつきから後ろに」

アルバード「ひえっ」

コウタ「スバルがいる」

スバル「私だ」

アルバード「お前だったのか」

スバル「そして振り返ると」

アルバード「振り返ると？」

スバル「アリサさんがいます」

アリサ「お帰りなさいリーダー」

アルバード「いい…笑顔です」

スバル「某プロデューサーみたいになってる」

アルバード「え、待ってアリサなんで怒ってんの？笑顔が、笑顔がめっさこわいん」

アリサ「また、ファン増やしてきましたねこの女ったらし」

アルバード「待って何ソレ、ファンって何だ!？」

コウタ「実はお前にはファンクラブがあるんだ」

アルバード「ご冗談はよしこちやんだぜ」

スバル「ところがぎつちよん」

アルバード「ぎつちよんちよん！」

スバル「御託はたくさんなんで。ファンクラブあるのは本当みたい」

アルバード「知らなかった…」

アリサ「リーダーはその、カッコいいんですから（小声）…もう少し気を付けてください」

アルバード「わかったって言っても自覚が無いんだよなあ…。大体ファンクラブがいたって俺にはアリサいるし」

アリサ「リーダー…!」

コウタ「ここ空調効き過ぎじゃね？」

スバル「あーあついあつい」

リンドウ「サクヤとはこういう過程飛ばしちまったからなあ」

コウタ「リンドウさんが悪いっすね」

アルバード「んー…ちよつち眠い、部屋戻ってるわ」

アリサ「あ…私もついて行きます」

アリサ「…」

アルバード「…ん？」

アリサ「えい」キイン

アルバード「見せつけるねー」キイン

アリサ「腕組まれるの嫌ですか？」

アルバード「歩きづらいこと以外に文句はない」

コウタ「ヒバリさん大至急ブラックコーヒー」

ヒバリ「用意してあります」

スバル「準備いいね、シエルも飲む？」

シエル「はい、いただきます」

全員「ずずう……………」

i
n
ア
ル
バ
ー
ド
私
室

全
員
「
甘
い
」

アリサ「あの、さつきさりげなく感応現象起きてませんでした？」

アルバード「気のせいじゃないかな」

アリサ「いつもよりぼやけた情報しか見えなかったような…」

アルバード「愛情で酔いそうでした」

アリサ「恋人同士とは言え勝手に覗き見るのはドン引きです」

アルバード「作者がわるいよー作者が」

アリサ「何言ってるんですか…？」

アルバード「ま、それは置いといて少し『ご休憩』でもしようか？俺も眠いし」

アリサ「…もう」

「ただいま戻りましたー」

アリサ「え？」

アルバード「え？」

「え？」

神機編

タワー・ショート・アサルト

アルバード「今日も問題無しつと、比較的平和だねえ」

自室へと歩を進めながらぼんやりと呟く

極東支部に帰って来てもう随分と経った

アウェイな場所での転々とした生活も悪くは無かったがやはりホームであるアナグラの生活が1番だ

なんか色々と福利厚生が良くなつたし

ムツミちゃんの飯がウマイ

カルビも懐いてくれた

恋人のアリサとも上手くいってるし

まさに順風満帆つてところだ

少し話をしよう

「微粒子レヴェルの真面目な話」

まずはじめに極東支部に戻って来た理由をば

表向きは神機のメンテと仕事の一段落、これは支部全体に知られている情報だ

表向きというにはこれを隠れ蓑としている情報があるということ

アナグラを離れている間にこちらでもそこそこな出来事があった

支部長のサカキや技術師のリツカ、それにリンドウさんにはこの用件を出張中に何度か相談した事がある

ひとつは左腕のアラガミ細胞の暴走

暴走といってもリンドウさんの神機握ったの時のような左腕が丸ごと変化するようなものではなく、ほんの少し皮膚が緩やかに侵食されている程度だ

コレのせいで両手持ちで神機振るうのが困難になった、左腕に力が入り過ぎて

そしてもうひとつが…

『あ、お帰りなさいご主人様』

レンと同様、神機の人格が見えるようになった

見えるようになった時期は他所でぼっちを拗らせていた頃に：

…この話はよそう

きつと見えるようになったのは暴走の副作用みたいなものなんだろう多分
見えちゃったのなら仕方ない

仕方ないないんだけど

『紅茶お淹れしますね、ご主人様』

アルバード（なんでメイド服なんだ!!）

神機の人格、名前をタシア

名前の由来は恥ずかしくて言いたくない

なぜかメイド服

ロングスカートで黒が基調メイド服に白のエプロンドレス

これが正統派メイド……！（にわか）

タシア『どうぞご主人様、熱いのでお気をつけください』

アルバード「おう、ありがとさん。……うん、美味しい」

タシア『恐縮です』

タシアの淹れてくれる紅茶はいい……

なんとというか、こう、好みにドストライクな味と香り

話が逸れた

待って読み返してくる

よし、おけー

簡潔に述べると体が緩やかにアラガミ化している、神機の人格が見えるようになった

以上

そして問題点を追加

それは…

おつと誰か来たようだ

アリサ「リーダー、タシアさん、入りますよ」

タシア『こんにちは、アリサさん。紅茶お淹れしますね』

アリサ「あ、お構いなく」

アルバード「…」

アリサがタシアを認識出来るようになった

他人の神機触らなくても見えるようになるんだね、不思議！

極めてイレギュラーな事態だったのでとりあえず、サカキ支部長とリツカの技術コンビに相談した

相談の結果、神機のメンテナンスと並行してアリサに健康診断を行うことに

アリサと健康診断…

ちよつとエロい響きが

と言つて、アリサにグーパンチで殴られたのは先週の話

健康診断、神機のメンテナンスの結果ある一点を除いて正常だった

ブラッドアーツ発生時の感応波に微弱なノイズのようなものが見つかった

これはブラッドアーツの見た目にも出ており、稲光するアリサのブラッドアーツに黒い光が混ざっていた

サカキ支部長の提案により俺も検査を受けることに

試しに俺の必殺パトローことブラックレイジを出してみることに

感情の昂りが必要なこのブラッドアーツはそうポン☆ポン出るものでもないのだが

リツカ「ここにプリンがあるじやろ？コレを…こうじや！」

目の前で俺が夜に食べようと楽しみにしていたプリンを目の前で食べられ

ブラッドアーツ難なく発動

食べ物恨みはコワイのだよ

計測した結果ブラックレイジの撒き散らす感応波がノイズと一致

タシアが見えるようになったのはこの波長が原因ではないかと推測された

タシア本人に聞いてみても分からないとのことなのでこの予測が現在有力候補に
なった

ちなみにプリンはこの後ムツミちゃんに元よりちよつと豪華なものを作ってもらっ
た、やったぜ

しかし

感応波が混ざってる…ねえ

まるで俺のがアリサの中に残ってるみたいだね☆

と言つて神機で頭殴られたのは3日前の話

こ○亀のBGMが流れてなければ即死だった

ひとまず、アリサにアラガミ化の心配は無し、俺のアラガミ化も今は大人しくなつて

いる、タシアに関しては特に害はないので他言無用の上で保留となった

そして現在

アルバード「やああめえええええてえてえええええ！」

アリサ「それですね、リーダーの耳をこう、ふうっ、て息をかけたときに『ひゃん』つて言っただすよ」

タシア「大変可愛らしいですね」

アリサ「そうでしょう」

辱めに遭っています

アルバード「もう…もう許して」

アリサ「自分のプリンを食べられた時の泣き顔とか…」

アルバード「め…女々しいだろ？」

アリサ「可愛いですよね」

アルバード「いつそ貶せ！」

タシア「極東を離れている間では、1人になるといつも東の空を眺めてました」

アリサ「ロマンチスト、やっぱり可愛い」

タシア『俺の女に手エ出してんじやねえ！（キリッ）』

アリサ「惚れ直しましたね」

アルバード「ああああああああああ!!!」

アリサ「ベッドでゴロゴロ悶える姿も峻るものがありますね」

タシア「わかります、褒められて嬉しいのですね」

アルバード「恥ずかしいんだよ!!」

この後もアリサとタシアに誉め殺しを続けられた

どうにも日頃のセクハラのしかしだつたらしい

こうして神機の人格と共に過ごす生活が表舞台となった

聖バレンタイン編

アルバード「そろそろバレンタインじゃん？」

スバル「そーですねー」

アルバード「バレンタインが近づいてくるとき…」

スバル「ドキドキする？」

アルバード「胃がキリキリする…」

スバル「バレンタインに対してそんな感想出てくるとは思わなかったよ」

アルバード「だってアリサが持ってくるのチョコじゃなくて兵器なんだから」

スバル「そんな大袈裟な…」

アルバード「だから今年は逆チョコというのをしようと思ってな」

スバル「逆チョコ…？そういうのもあるのか…！」

アルバード「そんでき、チョコの作り方教えてもらったんだよ、カノンに」

スバル「今度俺も教えてもらうかな…それで？」

アルバード「チョコクッキー作ろうとしたらさ」

スバル「うんうん」

アルバード「ザツハトルテが出来た」

スバル「…んん？」

アルバード「その後もいろいろ作ったんだけど、全部作ろうとしてたものと違うもの
が出来るんだ…」

スバル「…ああ、錬金術師の方でしたか」

アルバード「食うか？ある意味失敗作」

スバル「うわすご。頂きます…うん、これはうまい」

アルバード「完成形が斜め上に行くだけで味は悪くないんだよな。あ、紅茶飲むか？」

スバル「でも、なんで逆チョコなんですか？ストレートでお願いします」

アルバード「ホワイトデーのお返しはな。形に残るようにする方がいいらしい。お待ちどー」

スバル「食べ物より物ってことですね。ん、良い香り」

アルバード「そこである人の入れ知恵で先手を打とうということになったんだ」

スバル「ほむほむ」

アルバード「さらにその人にアリサへ逆チョコたホワイトデーは物でお返しが主流と吹き込んでもらう」

スバル「なるほど、読めた」

アルバード「つまり、そういうことなんだ」

スバル「受けより攻めだね！」

アルバード「わかってらっしゃる」

コウタ「俺たまにあいつらがわからなくなるんだ」

エリナ「大丈夫です、私もですから」

アルバード「じゃ、本番に向けてチョコ作るって来るわ」

スバル「俺も頑張ります」

バレンタイン当日

アルバード「アリサ、受けとつてくれないか？」

アリサ「もちろんですよ。手作り…ですか？」

アルバード「ああ、そうなんだが…」

アリサ「リーダーも料理下手とか…？」

アルバード「いや、そうじゃなくての。あんま手の込んだ物が作れなくてさ」

アリサ「開けてみてもいいですか？」

アルバード「オーブンや冷蔵庫に入れないものにしてー」

アリサ「こ、これは…！」

アルバード「ひよこ型のチョコ作ったんだ」

アリサ（かわいい）

アリサ「一生大事にします」

アルバード「頼むから食べて」

タシア『紅茶淹れましたよ』

アルバード「ああ、ありがとう」

タシア『アリスさんはコーヒーでしたよね?』

アリス「ありがとうございます。…ん、コーヒーに合う甘さです。美味しいですよ、
リーダー」

タシア『ふつつ、ご主人様ったらこんなので喜んでくれるかな？ドン引きされないかな？って心配してたんですよ？』

アルバード「もうお前に相談なんてしねえ!!」

タシア『あら、拗ねてしまいました』

アリサ「愛おしい（真理）」

アルバード「アリサさん!？」

アリサ「すみません、天使の降臨に思わず我を忘れてました」

アルバード「キャラブレすぎい！」

アリサ「あなたには言われたくありません」

アルバード「せやかて」

アリサ「でも悩ましいですね」

アルバード「何がさ」

アリサ「私だけ料理できない…」

アルバード「将来的に俺が台所に立つことになるだけだろ？」

タシア・アリサ「…」

アルバード「な…なんだよ」

タシア『ご主人様ったら大胆』

アリサ「不意打ちは…その、卑怯ですよ」

アルバード「なんか変なこと言ったか…？」

一方その頃

コウタ「ムツミちゃん、コーヒーブラックで」

ムツミ「そんなに飲むと胃が荒れちゃいますよ?」

コウタ「でも…ラブコメの波動が」

スバル「はい、シエル。あーん」

シエル「あ、あーん…」

スバル「えへへ、美味しい？」

シエル「はい、とても…その胸が温かくなるようです」

スバル「シエルが喜んでくれると俺も嬉しいな♪」

後輩A「先輩、俺もう…」

コウタ「しっかりしろ！傷は深いぞ！」

後輩B「先輩、彼はもうダメよ。ここに置いていきましよう！」

コウタ 「バカ野郎！大事な後輩を置いていけるかよ！」

後輩A 「先輩……！そんなに俺のこと……」

「ラウンジ内では桃色空間を熱い展開でなんとか乗り切ろうとする一部神機使いで盛り上がっていた

おまけ その1

日頃の感謝を込めてタシアにチョコを作った

アルバード「ごめんなタシア、エッグチョコにメッセージカード入れるつもりだったんだが…」

タシア『…ご主人様のことはそこそこ知り尽くしていると自負している私ですが』

アルバード「冷蔵庫からだしたらこんなことに…」

タシア『孵化するどころか、羽化した上神格化して鳳凰になるってどういふことですか…』

アルバード「俺にもさっぱり…」

おまけ その2

エリナ「ついにはおまけ扱いですかそうですね」

アルバード「え、チョコ嫌いだったか？」

エリナ「いえ、世界の理不尽に嫌気が差してただけですので」

アルバード「哲学的（？）な悩みをおもちで」

エリナ「それで…チョコ、私にですか？」

アルバード「おう、ザツハトルテを作っていた筈なのになぜかアプリコット入りのトリュフになっていたんだが」

エリナ「すみませんよくわからないです」

アルバード「まあ、食べてみてくれ」

エリナ「はい……。美味しいです。ちょっとプライドが傷つきましたけど」

アルバード「なんか……。ごめん」

復讐のホワイトデー編

シルフィ「そろそろ私もこれ以上の焦らしには耐えられません」

シルフィは決意した

必ずや出番を取り戻してみせると

シルフィはスバルの妹である。毎晩兄の匂ひに興奮と安堵を感じてから就寝するのが日課のブラコンである

スバルには彼女がいる

同じ部隊に所属する、ブラッド副隊長シエル・アランソン

兄はこの女に騙されている、そうに違いないとシルフィは考えた

シルフィ「目を覚まさせてあげなきゃ…」

ハイライトさんは今日も早退

ポンコツヤンデレブラコン・シルフィの復讐が始まる

ホワイトデー当日

協力者R氏とS氏により惚れ薬の開発に成功した

時は来たのだ

シルフィはシャワールームで体を清めてから惚れ薬入りの瓶を片手にスバルの部屋へと向かった

ところでこれは関係ない話なのだがみなさんはラブコメの王道をご存知だろうか
転校初日に曲がり角でぶつかつたり

主人公がヒロインの着替えに遭遇するといったものを思い浮かべるだろう

シルフィ「…今フラグが乱立したような」

??? 「やべえ！寝過ごした!!」

シルフィ「きや！」

??? 「うおっ!？」

曲がり角から出て来た誰かにぶつかり惚れ薬の瓶は宙を舞う

物理法則さえも超越する茶番の引力とかラブコメの波動とかご都合主義とかでなんやかんや瓶の蓋は空中粉碎しぶつかつた人物へと中身が全てかかつてしまう

??? 「ふええ…べとべとするよお〜」

シルフィ 「すみませ…あつ」

アルバード「もうっ！どこ見て歩いてるのよ!!ぷんぷん!!」

キモい

くたばれ

ないわー

ドン引きです…

アルバード「ナニコレ薬か？変な匂ひが…」

シルフィ「あわわわ」

アルバード「あ、悪い。なんか薬？だかなんだかをダメにしちまったな」

シルフィ「いえ、その…あ、あれ？なんだか…」

惚れ薬は本来飲み薬として使う予定であつた

液体に溶けやすく、飲んだ対象が1番最初に見た相手を愛おしく思う

もちろん性的な意味で

シルフィ（それをお兄ちゃんに飲ませてキヤツキヤウフフラブラブチュツチユ子沢山となるはずでしたのに…）

薬はアルバードの汗に溶け込み

甘い香りを放ち始めた…！

アルバード「んん？匂ひが無くなったような…つと悪い、急いであるから今度埋め合わせする」

シルフィ「待ってください！」

アルバード「お、おう？」

シルフィ「アルバードさんって……すごくそそりますよね」

アルバード「バイビー！」

アルバードは走った

何か危険なモノを察知したのだ

ラウンジにて待つクレイドルのメンバーの元へ走った

アリサ「遅刻ですよリーダー」

アルバード「悪い！もう、ミーティング始めてる？」

コウタ「今始めたところ…ん？アルさ、なんか臭わないか？」

アルバード「マジか、そんなに臭う？」

ソーマ「待っててやるからシャワーでも浴びてこい」

アルバード「ソーマきゅんの貴重なデレシーンあざっす！」

ソーマ「なぐ……っ！」

アルバード「どったのソマたん？」

コウタ「アル…」

アリサ「リーダー…」

アルバード「おいおいもつてもてだな俺。みんな俺のことみつめんなよ照れんじやねーか」

じりじり

アルバード「お、おいお前ら目が据わってるぞ？」

じりじりじりじり

アルバード「あ、ほらミーティング！ミーティングあるだろ!? だから…逃げる！」

アルバードは逃走する、再び

アルバード「道中男女問わず襲われたぜ…」

道中青いツナギの人がいた気がするけど気のせいだったのだろう

アルバードは神機保管庫に急いだ

アルバード「助けて！リツカえもん！」

リツカ「あれ？どうし…っ！」

匂いに気付くと咄嗟にリツカはガスマスクをつける

アルバード「今度は何やらかしやがった悪友」

リツカ「取り敢えず状況を教えてくれる？」

アルバード「かくかくしかじか」

リツカ「いあいあくとうるふ」

アルバード「召喚すんな」

リツカ「うーん、シルフィちゃんに渡した薬かあ…そもそも飲み薬なんだよねそれ」

アルバード「つてことは、もしかして塗り薬的な使い方をした場合の効能って」

リツカ「話を聞く限り作用する方向が逆になってるね」

アルバード「なんということをしてくれたのでしょうか」

リツカ「念のため解毒薬はあるけど…量が足りないね。幸い材料は揃ってるから時間さえあれば作れるよ」

アルバード「解毒薬の作成時間と薬の効能時間は？」

リツカ「作成に量が量だし4時間、効能は丸一日つてどこかな？」

アルバード「おーけー、それまでには戻ってくる」

リツカ「…死なないでね」

アルバード「俺を誰だと思ってやがふ」

元気なフラグ大乱立

アルバード「取り敢えず、誰かとの接触だけは避けねば」

み

♡ よ た け つ

アルバード「ヒイイイイイイ!!??」

シルフィ「アルバードさんのアルバードくんにごんにち…もう! 暴れないでください! パンツが脱がせにくいじゃないですか!」

アルバード「誰かー! 男の人呼んでー!!!」

シルフィ「いいじゃないですか、あなただってこういう作品には数多く出演して」

アルバード「やってない!」

シルフィ「ええ!?!」

アルバード「貴様と一緒にするな!!」

シルフィ「ならば堕ちるところまで堕ちるといいのです!!!」

スバル「何してるか堕妹」

シルフィ「あふん♡」

シルフィK・O・

スバル「すみません、うちの堕妹がご迷惑をお掛けして…」

アルバード「お、おう。お前さんはまだ大丈夫なんだな？」

スバル「大丈夫ですよ、俺にはシエルがいますから」

アルバード「そうか、よかつ…ん？」

スバル「う、浮気なんて絶対にしないもん…」

アルバード「大丈夫じゃないけど耐えてたー！」

シエル「隊長…」

アルバード「シエル君！スバルを連れて逃げるんだ！」

シエル「3人で愛し合えばいいんですよ」

アルバード「チクシヨーーー！！！！」

スバル「そうか、その手があった」

アルバード「納得してんじやねえよ！！もうやだおうちかえる！！」

こうして極東支部で起きた惚れ薬ハザードは4時間に渡り続いた

衣服はボロボロ

レイプ、リンカーン、リョジーヨク一歩手前から何とか逃げ出したものの

アルバードの精神は磨り減っていた

Gとかになりそうな勢いだったが男性陣の熱烈なアプローチとか乙女ゲのC

アルバードは自分が女だったら落ちてるとか思ってしまった

アルバード「リツカ、薬は…？」

リツカ「大丈夫、もう終わったよ。あとは散布すれば落ち着くと思う」

アルバード「よかった…もう、ゴールしていいよね？」

リツカ「うん、お疲れ様」

操りの人形の糸が切れたかのようにアルバードは倒れた

その時頬を伝ったのは汗か、涙か

それはリツカのみぞ知る…

リツカ「疲れた時は、さ？甘いものがいっていうよね。前に渡せなかつたからさ、起きたら食べてね？」

アルバードに毛布を掛け、小さな袋をそつと添えた

リツカ「さて、最後の仕事しますか」

かくしてこの事件は終わりを迎えた

薬の影響を受けた者は記憶がすっぱ抜けた代わりに二日酔いのような頭痛に見舞われたそうなの

結局シルフィの復讐は失敗に終わり

後にこっ酷く怒られた末に新しいセカイに目覚めたのはまた別のお話

新作…だと!?

アルバード「しかも2つ!」

スバル「攻めてますねコレ」

ソラ「えつと2で3年レイジバーストで更に2年、えつとヒマラヤが…207X年で書いてある」

アルバード「…おいソラ、自己紹介しとけ」

ソラ「あ、はい。オンラインで細々と活動してる九条ソラです!趣味はチューチュートレインで青髪でなんか回ってたらそれ自分でーす!」

アルバード「馬鹿野郎特定されんだろ」

スバル「そんな酔狂な人いないでしょうよ」

ソラ「ですよー」

アルバード「お前が言うな」

スバル「…あれ、この資料さ」

アルバード「どしたのわさわさ」

スバル「黙ってナーミン。レゾナントオプスの方、主人公決まってるっばいね。下野と大空さんだ」

アルバード「え、マジかよやった。下野ボイスとか新人イビリが捗るわ」

ソラ「先輩サイテーです」

アルバード「お、アリサ支部長になってんじやん。流石」

スバル「4年も経ってればそうなりますよね、その頃には結婚くらいは…」

アルバード「しねーだろうよ、あいつは」

スバル「え？」

アルバード「支部長の仕事に専念するためだよ。どうせ4年経つても俺は現役だ」

ソラ「ヘタレめ」

アルバード「お？生意気言うのはどの口か？こーのーくーちーかー？」

ソラ「あつちよぶ」

スバル「エリナも隊長だつてさ、いやー時の流れを感じるねー」

アルソラ「あつすーみす！へい、あつすーみす!!」

スバル「お前ら自由か」

アルバード「主人公達の信頼を得たところで登場して子供扱いしたい」

スバル「なにそれ楽しそう」

ソラ「そいえば、ウチの支部から人を出せないのは仕方ないとして」

ソラ「なんでブラッドから人来てないんでしょうか」

スバル「こここここれから来るんだよ」

アルバード「落ち着けよ肉バ〇ブ」

スバル「悪意！」

ソラ「あとひとついいですか？」

アルバード「どうした言ってみろ」

ソラ「アリスさんはファスナーが閉まらなくなる呪いにもかかっているんですか？」

アルバード「…？」

スバル「…？」

アルバード「あ、ホントだ。あいつの下乳とか見慣れすぎてて麻痺してた」

ソラ「え？揉み慣れてる？（幻聴）」

スバル「あながち、間違いではない気が」

アルバード「うっさいわ。あの格好で本部とか行くのやめてほしいわ」

ソラ「薄い本が厚くなるな！」

アルバード「決めた俺本部行くわ」

スバル「ソラが煽るからバカが暴走するじゃん」

アルバード「いや、それどころかお前あれだ、懐に仕舞っておいたこれ渡すわ」

スバル「その箱まさか」

ソラ「ロー〇ー?」

アルバード「マリアが聞いたら泣くぞ」

アルバード「ほら、あれだよ。エンゲージリングだよ」

スバル「いつも持ってたの!？」

アルバード「いやーほら、タイミングが掴めなくてな」

ソラ「やっぱりヘタレ…」

アルバード「あるばんち」

ソラ「いたい！」

アルバード「だが感謝しよう九条君。結局想うだけではダメだと言うことだな！」

アリサ「リーダー？用事ってなんですk」

アルバード「俺の女を！誰にも渡すものか!!」

スバル「あつ」

ソラ「あーあ…」

アルバード「どうかしたか？二人共後ろに…」

アルバード「誰もいないぞ？」

スバル「あー…アルバードはとにかくアリサさんを探しに行ってください」

アルバード「え？」

ソラ「しのごの言わずにゴウ!!!」

アルバード「いつてきまーーーす!?!」

スバル「あ、まだ3の話ししてなかった」

ソラ「次の主人公は順当に行くにあの先輩ですよね？」

スバル「どーだろ？2刀流っぽいから女狐が出張って来そうで怖い」

ソラ「ま、他作品への殴り込みは決定ってことで」

スバル「そだね、んじゃストーリーまだ先が長そうだし頑張って」

ソラ「はーい、じゃ」

スバル・ソラ「解散！」

ちよつと裏側

アルバード「うっさいわ。あの格好で本部行くとかやめてほしいわ」

タシア『ん？流れが変りましたね』

タシア『このタイミングでアリサでも呼びに行きましようか』

タシア『うふふ、御主人様喜ぶかな?』

タシア『アリサさん、御主人様が会議室でお話があるそうなので赴いてもらってもいいですか?』

本編にもどる

エリナ編 第5話 平和な時間

アルバード「エリナよ」

エリナ「何ですか」

アルバード「平和だなあ」

エリナ「そうですね。最近任務もスマートにいきますし、これと言った事件もありませんからね」

アルバード「なあ、エリナ」

エリナ「何ですか」

アルバード「足痺れてきたからそろそろ膝からどいてくんね？」

エリナ「嫌です」

アルバード「付き合い始めてからツンとデレの比率が素敵になって甘えてくるのはい

いんだけどさ」

エリナ「ん？何か言いたいことがあるんですかロリコンで浮気者の変態野郎は」

アルバード「いやほらあれやん、オペレーターとの交流を深めることで円滑にミツシオンを進めて行くというね…だからほら浮気ちやうんよ。あの、だから、その太腿の内側抓るのやめて？あ、踵で脛蹴らないで？そこら辺お肉薄くて神経が痛い痛い痛い」

エリナ「あと、これはなんででしょうかね？」

アルバード「え？…あ、それ俺の聖典！」

エリナ「なんですかわこれ？私への当てつけですか？そんなに大きいのがいいんですか？脂肪の塊がいいんですか？ゆさゆさしてるのがいいんですか？たゆんたゆんしてるのがいいんですか!？」

アルバード「ち、違うんだ！俺はほら雑食だから！」

エリナ「なんですかわ？浮気認めるんですか？ロリコンで浮気者の最低ななんでも大きいければ良い変態野郎」

アルバード「違うんだ！変態は認めるが、俺はぴゅありいなんだ一途なんだ！」

エリナ「浮気者はみんなそう言うんです！」

アルバード「嘘じゃない！俺だった本当は我慢してるんだ！」

エリナ「なにをですか？」

アルバード「体格差がなければエリナに○○○○○させたり○○○○を○○○○で○○○○
○○○○○したりetc etc.」

エリナ「変態どころか犯罪者ですか!？」

アルバード「だからなるべく嗜好をずらして我慢してたんだ！」

エリナ「そんなこと言ってくれればやってあげますよ！」

アルバード「ま、まじで？」

エリナ「だって…:その」

アルバード「へ？」

エリナ「…して、る」

アルバード「え？なんだった？」

エリナ「I c h l i e b e d i c h！」

アルバード「あ、ずりい！」

エリナ「ずるくないですう！普通に言っただけですう！」

アルバード「子供か!!」

エリナ「ええ悪うございますね、子供ですよ、幼児体型ですよ」

アルバード「ええい、なら俺にも考えがある！」

エリナ「デリカシーの欠片もないあなたにそんなこと…」

h
n
i
c
h
t
g
e
h
e
n
l
a
s
s
e
n
:」
アルバード「Egal was passiert, ich werde dic

エリナ「耳元でそういうこと囁くのは卑怯です」

アルバード「チヨロ可愛い」

エリナ「うがー!」

アルバード「はっはっは」

エリナ「そんなにからかうならもう添い寝してあげませんよ!」

アルバード「ん?別に良いぞ」

エリナ「…え?」

エリナ「じゃあ、おはようのちゅーも無しですよ?」

アルバード「そっかあ、エリナがやりたくないなら無理強いは出来ないよなあ」

エリナ「…うう」

エリナ「なら膝枕も耳かきも無しですよ? 本当にいいんですね?」

アルバード（動揺してるなあ）

エリナ「本当にダメですからね? 今日から禁止しちゃいますよ?」

アルバード「そうだったのなら仕方ないなあ。今日から俺は一人寂しく布団に自分で耳かきして硬い枕で寝るのかあ」

エリナ「…グスッ」

アルバード「あ、やべ」

エリナ「なんでそんなイジワル言うの！やだやだ一緒に寝てくれなきゃやだあ！抱っこしながら寝なきゃダメ！寝る前も起きた後もちゅーするの！」

アルバード「あーはいはい、泣くな泣くな」

エリナ「ぼかあ…」

アルバード「つたく、見事に自分にダメージ入る提案したな」

エリナ「だいたい、本当にそうしてたらどうするつもりだったの？」

アルバード「んー、お前が先に折れるか、抵抗しようが勝手にやってただろなあ」

エリナ「なんかムカつく」

アルバード「ほらほら膝枕してやるから機嫌直せって」

エリナ「ん…」

アルバード「好きなだけそうしてていいんだよ、俺はお前のモノだ」
エリナ「私も…だよ」

アルバード「ん？」

エリナ「すう…すう…」

アルバード「ん」

アルバード「平和だなあ」

今後について

みんなー、こーんにーちわー！

あれあれあれ？げーんきがなーいぞー！？

もういつかいいくぞー

みんなー、こーんにーちわー！！

数ヶ月ぶりのみんなのゴッドイーター、アルバードさんだよ！

今はね、アルバードさんとってもピンチ！

みんなは石抱って知ってる？

そう、後ろ手を縛られて洗濯板みたいなところに正座させられ、膝に重りをのせられるアレさ！

現場のアルバードさーん？

アルバード「あああああ!!!」

タシア『それだけ叫ぶことができればまだ余裕ですね、3枚追加』

アルバード「イタイイタイイタイイタイタタタタタタ!!!」

タシア『反省したなら、ほら復唱して下さい』

タシア『私は中途半端な状態で投稿をおろそかにしました』

アルバード「わたしはあおあ！中途半端な状態でえええ!!投稿をおろそかにしました
あああああ!!!」

タシア『駄文しか書けないくせに投稿すらまともにできない低脳で申し訳ありません』

アルバード「駄文しか書けないくせにいいいい！投稿すらまともにできない低脳でええ!! 申し訳ありませんんんん!!」

タシア『私は自分の神機にメイド服を着せてペロペロしたくなるほど興奮するド変態です』

アルバード「アリスにメイド服来させて頬を紅潮させつつご主人様って言わせてええええええ!!!!」

タシア『5枚追加』

アルバード「しまったあああああああ!!!」

スバル「…」

スバル 「なあにこれえ？（○戯風）」

スバル 「え、待って、ホントこれ何？新しいプレイ？ていうかこのメイドさん誰？」

タシア 『はじめましてスバルさん、私はタシアと申します、数分後には記憶を無くさせていただきますがよろしくお願いいたします』

スバル 「あれ、今サラッと怖いこと言ったね？」

タシア 『もうこれで十分ですよ、ご主人様。コレ下ろしますよ？』

アルバード「あー、お疲れ。足の間が無いわ」

スバル「お帰り何してんの？」

アルバード「謝罪だよ謝罪、焼き土下座は流石に無理だから石抱になった。更新しな
くなつてからもう半年近くになるし」

スバル「未だに楽しみにしてる人とかいないだろ」

アルバード「ケジメだよケジメ。新シリーズの予定もあるし」

スバル「オンラインと…レゾプ？」

アルバード「そうそう、ストーリー終了か区切りとかで始めたいんだよな」

アルバード「そんなもってこのシリーズは俺がレイジバーストみたいなの使えるまで
終わらない」

スバル「無茶苦茶な」

アルバード「ゴールは考えてあるのに途中経過がイマイチ書けない」

スバル「安心して読者はきつと期待してない」

アルバード「屋上」

スバル「いつも通りに無理矢理すればいいんだよ、注意事項にも色々あるし、ブラツクレイジもそうだったでしょ？」

アルバード「まあ、レゾプ書きたくてうづうづしてるからなるはやで終わらせるわ」

アルバード「じゃ、タシアよろしく」

タシア『はい』

スバル「おい待て、それMIBのフラッシュユだろ！記憶消すつてそれかよ！」

アルバード「ええいごちゃごちゃうるさい」

タシア『それではまたどこかで』

パシヤツ

スバル「…ハッ!？」

アルバード「気が付いたか？」

スバル「なんか寺みたいな名前のシスターに全速力で追いかけて回された気が…」

アルバード「口にしない方がいい：現実になる」

スバル「そうする。ところで本編開始前に言いたいことあるんだよね？」

アルバード「ああ、ソラと繋げるぞ」

ソラ（通信）「気がついたらあく同じクエばかりプレイそしていつも同じ場所ですーぬー」

アルバード「今年のヒットナンバー、サリエルが倒せないじゃないか」

スバル「待つてそれ知らない」

ソラ「原因探ったら、運に極振りしてたんで即死ですわ」

アルバード「今リセットアイテム探してる」

アルバード「そんなことは置いてレゾプだよ」

スバル「主名どうしよつか」

アルバード「公式名でよくね？メイキング無しの声優固定だし」

ソラ「でも勝手に使っているのかな？」

アルバード「そうだったら伝家の宝刀だよ」

スバル「※この作品は二次創作であり公式とは一切関係なく、作者独自の解釈や設定などが多分に含まれます。以上のことに吐き気、目眩、頭痛がする方はブラウザバックを推奨します」

アルバード「※↑これどうやって発音するん？」

スバル「こう腹から音の球を出す感じ」

ソラ「嘘つけ」

アルバード「じゃあ神木君にお願いするか」

スバル「異議無し」

ソラ「バカテスネタが捗るう、荒ぶるう、溢れ出るう!!」

アルバード「アキヒサインエロースチャージ!!」

3 バカ「ぶるうああああ!!!」

新旧ごつた煮編

プロローグ新編始動、本部に殴り込みだ！

時は20XX年地球はアラガミの脅威に晒されていた！

アルバード「Youはショック!!」

スバル「愛で空が落ちてクルウ!!」

アルバード「本部は消毒じゃあ！」

スバル「久々の登場でテンション上がった俺達を止められるものなら…!!」

アリサ「…」

シエル「…」

アルバード・スバル「申し訳ありませんでした!」

アルバード「ところでレゾプ一周年ドレス良かったです」↑引いた人
スバル「とても興奮しました」↑引いた人

アリサ「…もう／＼」

シエル「…今夜はドレスですか／＼」

アルバード「染まってるんなシエルちゃん」

スバル「そんなことより本部だ本部、パーティーに呼ばれてなくても行くしかない」

アルバード「後輩には洗礼を与えねば」

スバル「そこで企画を思いつきました」

アルバード「聞こうか」

スバル「キンググク〇ムゾン!!」

アルバード「王様ゲーム!!」

スバル「いええええい!!!」

レオ「ええええ!?!」

エリナ「あれ、さっきまで部屋で報告書まとめてたはずじゃ…」

アルバード「俺が訪問して拉致った」

エリナ「おい」

コウタ「バガラリー見てたはずなんだけど」

アルバード「呼び出されて自分で来たな」

アルバード「ちなみにスバルからはすでに懇親会の概要を聞かされて準備と日取りを決めてスケジュールを合わせてゲストを呼んだぞ」

アレク・セラ・ティオナ「よろしくお願いします」

レオ「みんな適応早くない？」

キグルミ「…」

アルバード「こいつは知らん」

スバル「では明○、説明を頼む」

レオ「違いますよ!?!」

アルバード「ちかたない、俺が説明しよう。ここに1から10と書かれたくじと、王と書かれたくじがあります。王を引いた人は数字を指定して他の人に命令ができます。例えば1番が王の肩を揉むとか、3番が5番にしつぺとか。

そして王様の命令は！」

全員「絶対!!」

アルバード「それじゃ全員くじは引いたな?セーのっ!」

全員「王様だーれだ!」

全員「…」

コウタ「あ、俺だ」

コウタ「そうだな。それじゃ4番が7番に愛の告白で」

アルバード「ちよつと待て7番誰だあ!」

エリナ「(そつと手を挙げ)」

アリサ「」ギリイ

アルバード「貴様あ!なんつー命令しやがる!」

スバル「まあ、落ち着いて。これはゲームだ、それに自分で言つたらう?王様の命令は?」

アルバード「絶対……！」

コウタ「あ、ちゃんと本気でやれよー」

アルバード「エリナ！」

エリナ「はい!？」

アルバード「俺、あいつの墓前で誓ったことがある。泣いてた幼いお前を見て、絶対に守ってやるって約束したんだ。だからずっと側にいる、お前が好きだ、エリナ」

エリナ「あの時のこと、覚えて……」

アリサ「リーダー……」

ティオナ「なんだかドキドキしますね」

アレク「おい、セラ顔真っ赤だぞ」

セラ「アレクこそ……」

エリナ「／／／／」

レオ「言われた本人は爆発しそう」

アルバード「アリサ、一部本当のことだけどあんまり気にしないでいただけると」

アリサ「…」

スバル（いい台詞だったなあ）

コウタ（感動的だなあ）

スバル・コウタ（だが無意味だ）

アリサ「今夜、覚悟してくださいね？」

アルバード「ちくしょう！なんか許される流れだったろ！」

スバル「むしろどうしてそうおもった」

シエル（私も、もっと情熱的に…！）

アルバード「ちくしょう次だ！せーのっ！」

全員「王様だーれだ！」

全員「…」

エリナ「あ、私だ」

エリナ「それじゃ、9番が1番にデコピンで」

コウタ「と、1番誰だ？」

スバル「よかった、ソフトなやつで」

コウタ「いくぞー、ホワタア!!」

スバル「ぎゃああああ!!」

アルバード「ゴッドイーターの全力デコピンか、そら痛いわ」

コウタ「女の子相手だったら軽くだったけどね」

スバル「大丈夫？頭割れてない？」

シエル「いたいいたいのとんでけー」

スバル「シエルさん!？」

シエル「／／／／」

アレク「恥ずかしいのかよ！」

セラ「肌が白いからわかりやすいくらい赤いわね」

スバル「まだまだだあ！せーのっ！」

全員「王様だーれだ！」

全員「…」

アレク「あ、俺だ！」

アレク「つつてもどうすればいいんだ？」

アルバード「まあ、決めかねてたらソフト何やつでいんじゃないか？握手とかハグとか暴露とか」

レオ「暴露がソフト…？」

アレク「それじゃ、1番が10番にハグで！」

エリナ「また私!?!まさか…」

アルバード「安心しろ俺じゃない」

キグルミ「…(そつと挙手)」

アルバード「テーマパークちつくな組み合わせだな、エリナちつちやいし」

エリナ「ちつちやくないよ!」

約全員(かわいい)

エリナ「それじゃ…:お願いします」

キグルミ「…」

ティオナ「さつきとは違うドキドキ感がありますね」

アルバード「俺あのタイプの着ぐるみ着たことないんだけどどうなってるんだろ」
スバル「なんか固そうなイメージが」

レオ「エリナ隊長? どうですか?」

エリナ「程よい柔らかささと力加減が絶妙なバランスで布団にベッドに体預けたような

錯覚がした」

ティオナ「いいなあ…」

セラ（いいなあ…）

アルバード「今度俺のと比べてみようぜ」

エリナ「また今度に。それじゃ次に。せーのっ！」

全員「王様だーれだ！」

全員「…」

アリサ「私、王様です」

アルバード「魔王様の降臨か」

アリサ「7番が5番に全力でタイキック」

アルバード「嘘だろ、こいつ的確に俺の数字当てやがった!？」

スバル「7番俺です」

アリサ「思いつきりどうぞ!」

館内放送「ピンポンパンポーン!」

アルバード「まあ、待て先に館内放送を聞こうじゃないk」

?デデーン／

アルバードOUT

アルバード「誰だ、ちくしょう!!」

スバル「フンツ」ビュツ!!

アルバード「オウつつ!!!」スパアン!!

レオ「ブフツ！」

コウタ「なんだ今の声w」

アルバード「大丈夫？俺の尻割れてない？」

スバル「あーこりやいかんね。真つ二つだわ」

アルバード「そんな先生！」

セラ「急にコント始まったわね」

アレク「むしろ、今までの流れが全てコント」

テイオナ「だ、大丈夫ですか？」

アルバード「優しくさすつてくるは？」…なんでもないです。俺ダイジヨウブ」
テイオナ「辛かったら言っってくださいね？」

アルバード「なんや天使がおる」

約全員（わかるわ）

アルバード「次いくぞー！せーのっ！」

全員「王様だーれだ！」

全員「…」

コウタ「あれ、また俺？」

コウタ「んーと、4番と2番が同じ飲み物をストローで飲む！」

アルバード「なんか俺多くねえ？」

シエル「4番、私です」

アリサ・スバル「ギリイ

アルバード「いや待てカップルジュースなんてどこに」

コウタ「ここに」

アルバード「これは浮気じゃないから罰ゲームだからあー！」

アルバード「チュュー

シエル「チュュー

アルバード「／／／／」チュュー

シエル「／／／／」チュュー

アリサ「ゲシゲシ
スバル」ゲシゲシ

コウタ「あ、やめて無言で蹴るのやめて」

レオ「極東組のダメージが大きい」

アルバード「覚えてろコウタ、次だあ！せーのっ！」

全員「王様だーれだ！」

全員「…」

アリサ「私も2回目ですね」

アリサ「じゃあ、5番と9番は想い人の公開してください」

アルバード「狙い撃ちにされてるのが気になるけど、これなら痛くはない！」5番

セラ「…ついにこつち側にも」9番

アルバード「ふふん、このアルバードさんの想い人といえは、カn…アリサに決まってるだろう！」

アリサ「アルバード、屋上に行きましよう？話があります」

アルバード「名前呼びが嬉しくない！違うんだ！別のアルバードが一瞬混線してきて」

セラ（これならどさくさに紛れて）
アルバード「逃がさんぞお？」

セラ「…!？」

セラ「…想い人、というよりも尊敬している人なら」

アリサ「大丈夫ですよ」

セラ「…アレク」

アレク「へっ？」

レオ「ほほう」

エリナ「これはこれは」

セラ「…っ／＼／＼次！ほら、せーのっ！」

全員「王様だーれだ！」

全員「…」

アレク「俺も2回目ツス」

アレク「んー9番が2番の長所をあげる、で」

エリナ「私が…」

コウタ「俺の長所、か」

アルバード「おっと、成長した元部下からのむず痒いイベント発生、やるねアレク君
！」

レオ「そういえばコウタさんの隊で隊員なんでしたね」

エリナ「面と向かって言うのと恥ずかしいけど。優しすぎるくらい優しいところ、とか
？」

アルバード「あ、そういえば俺もコウタの怒ったところ見たことねえ」

スバル「レオ君、彼にこう言ってみて…ゴニョゴニョ」

レオ「えっと、妹さんを僕にください」

コウタ「妹欲しくば俺を倒していけ」<●><><><●>>

アルバード「神々の義眼でてんぞ」

スバル「あっちも妹いたっけ」

エリナ「もういいよね?次、せーのっ!」

全員「王様だーれだ!」

全員「…」

全員「…」

アルバード「ん？誰だ？」

スバル「待て、まさか」

キグルミ「…」つ王

約全員（ついに…来た！）

キグルミ「…」ジエスチャー

アルバード「3番が…6番に」

キグルミ「…」ジエスチャー

スバル「壁…ドン？」

レオ「3番…」

ティオナ「6…番です」

アルバード「こういうのを待ってた」

スバル「ついでに甘い言葉を囁くんだ」

レオ「命令に含まれてないですよね!？」

キグルミ「…」グツ

アルバード「王の許可が出たぞ」

スバル「さあ、思う存分やれ」

レオ「ええいままよ!」ドン!

ティオナ「…!」

レオ「今夜、君を奪いに行くよ…」

アルバード「キヤー」

スバル「キヤー」

ティオナ「」

アリサ「大変です、気絶してます」

アレク「え、衛生兵！衛生兵！」

レオ「誰がティオナに酷いことを！」

セラ「強いて言うならあなたよ」

アルバード「さて、そろそろお開きの時間でございます」

スバル「次回はもっと人増やす？」

レオ「また開催されるんですか!?!」
コウタ「今度はちゃんと誘えよー」

アルバード「それでは解散!!」

アリサの誕生日

アルバード「誕生日おめでとう、アリサ」

アリサ「ありがとうございます、リーダー」

アルバード「その癖抜けないな、はいこれプレゼント」

アリサ「これは…絶対命令権？」

アルバード「正直どんなもので喜んでくれるかわからなかったんで、委ねてみることにした」

アリサ「つまり何でも言うこと聞いてくれるんですよね？」

アルバード「その念の押され方はちよつち怖い、一応俺のできる範囲で、一枚につき1つの命令ってことで」

アリサ「5枚もある…ふふっ」

アルバード「笑い方怖いっすアリサさん」

アリサ「まずは、2人きりの時はサングラスの着用を禁止します」

アルバード「ふっ…これを脱ぐことは、人前でパンツを脱ぐことに等しい」

アリサ「じゃあ、パンツがなければ恥ずかしくありませんよ」

アルバード「待て、その理屈はおかし…やめ、スボン引つ張るな！わかった脱ぐ、脱ぐからあ！」

アリサ「パンツを？」 ワクワク

アルバード「グラサンをだよ！」

アルバード「うう、お目々が寂しい」 スチャツ

アリサ「もつと恥辱にまみれた表情でお願いします」

アルバード「貴様は歪んでいる…！」

アリサ「そうさせたのは貴方だ！」

アリサ「アルバードという存在が私の性癖を歪めた！」

アルバード「だが残念だなアリサあ！命令は一枚につきひとつ！つまりは追加の命令はもう一枚を使うことになるぞ！」ロンパア！

アリサ「くっ！残弾は4：無駄撃ちは出来ないですね」

アルバード「ふう、やれやれだぜ」

アリサ「では、もう一枚を使います」

アルバード「ばっちこい！」

アリサ「私に隠し事をしないでください」

アルバード「おーけい、どんな暴露を聞きたい？」

アリサ「すでにあるんですか？」

アルバード「エッチなものから、素朴なものまであるぞ！」

アリサ「その笑顔殴っていいですか」

アルバード「待て、その拳をしまえ。なに、秘密なんて可愛いものだよアリサくん」

アリサ「聞きましょう」

アルバード「黙ってたんだが出張先で逆ナンされた」

アリサ「所属と名前を教えてください」

アルバード「落ち着け落ち着け、なにも無かったから」

アリサ「本当ですか？ 実は薬漬けにされていたり、催眠術で忘れていたり、弱みを握られてたり、快樂で奴隷にされていたりしません？」

アルバード「そんなエロ同人みたいな」

アリサ「それはどこで売ってますか？」

アルバード「例えだよ！」

アリサ「では3つ目、私より先に死なないでください」

アルバード「お前より後に死ぬのもごめんなんだが」

アリサ「妥協して2人同時はどうですか？」

アルバード「いいだろう、これが本当の死が2人を分かつまでってことで」

アリサ「まだ2枚ありますけど、次で最後にします」

アルバード「まあ、別に今日限りってことはないからな」

アリサ「子供は何人欲しいですか？」

アルバード「ん？」

アリサ「個人的には最低3人は欲しいところです」

アルバード「え？え？」

アリサ「まあ、子供は授かりものと言いますし、私達の頑張り次第ですかね」

アルバード「え、ちょ、なにをする、やめ…」

「アーーーーー！！！！」

エリナ 誕生日

アルバード（初代主人公）「色々ぐだってたらレゾナントオブス終わる」

スバル（2主人公）「寂しいなあ」

アルバード「オンラインより1年半長かったな」

スバル「2年半くらいもったか…」

アルバード「ゴツドイーター はこのまま廃れてしまうのか…」

スバル「アラガミいなくなったなら廃れても問題ないんだけどね」

アルバード「3で馬鹿の科学者がウチのソマたんいぢめてまた世界ピンチだしな」

スバル「ところであの灰域、こっちの聖域は大丈夫なんですかね」

アルバード「実際どうなったかは知らんが灰域がオラクル細胞を持っていたら大丈夫
なはず」

スバル「聖域内ではオラクル細胞が活動を停止するんだもんね、俺たち常人並のパワーになるし」

アルバード「そうそう、地殻変動と同じくらいの速さで聖域は広がるから何千何万年と時間をかけて世界からオラクル細胞を除去できるの」

スバル「その前に人類滅びませんか？」

アルバード「そのための俺たちだ」

スバル「謎の適正により2人ともAGE化？」

アルバード「バツカ、声に出すな現実になる」

スバル「そこんとこどうなのツバキくん」

ツバキ（3主人公）「…ん？寝てない、寝てないぞ？」

アルバード「鼻提灯が割れたとこ見逃さなかったからな」

ツバキ「AGEの適合条件だろう？」

スバル「あ、聞いてた」

ツバキ「キースほど詳しくはないが…たしか適合率は非常に低い、適合したとしても後遺症なんかが出るそうだ。だから孤児を実験動物扱いで適合試験を受けさせるらしい」

アルバード「…俺ら適合率ってそれぞれ高かったよな」

スバル「いけんじゃね？って思ったでしょ」

アルバード「俺が適合できれば他の奴のリスク減らせるならやるぞ、後はリツカの仕事だが」

ツバキ「…本音は？」

アルバード「二刀流かっくいいい」

スバル「わかる」

アルバード「ところで9月19日てエリナの誕生日なんだけどさ」チクチク
スバル「終わるね9月24日にレゾプ」

アルバード「ギリギリ間に合うのーね」チクチク

ツバキ「マスカルポーネ」

スバル「クロ○ス先生かよ」

アルバード「それ伝わる？」チクチク

スバル「ところでなにそれ」

アルバード「誕生日プレゼント、カピバラ人形」チクチク

スバル「そのとなりに置いてある猫っぽいのは？」

アルバード「こいつはカーバンクル、伝説上の生き物さ」チクチク

スバル「へー、伝説って？」

アルバード「ああ！」ルビィ！

ツバキ「なんだその会話、待って今鳴かなかったかソレ!？」

スバル「何かおかしかった？」

ツバキ「ええ……？」

アルバード「お、そろそろ出来上がるぞつ…と、よしこんなもんか」チクタク

スバル「かわいい、後で作り方教えて。シエルが喜びそう」

ツバキ「俺もいいか？フイムに作ってあげたいんだが…クレアも好きかな、こういうの」

スバル「お、なになに気になる子でもいるの？」

ツバキ「いや、いつも世話になってるから感謝とか」

アルバード「そういあピユアっ子はな部隊のみんなって言うんだよ、素直におなりなさいな」

ツバキ「それよりあんたは早く渡しに行ったらどうだ？今日なんだろう？」

アルバード「おつといけねえ、スバルじっくり聞いて」といって」

スバル「はいなーいってらっさーい」

ところかわって

アルバード「エーリナ、誕生日おめでとう」

エリナ「あ、覚えててくれたんだ。ありがとう」

アルバード「はい、これ誕生日プレゼントのカピバラのぬいぐるみ」

エリナ「可愛い…まさか手作り？」

アルバード「サクヤさんに教わって俺が作った」

エリナ「可愛いけどなんか悔しい」

アルバード「なぜだ」

エリナ「女子力負けしてる気がする」

アルバード「ハハッ」

エリナ「フンっ！」スパーン

アルバード「腿痛あ!!」

エリナ「今更女子力とかwwwって思ったでしょ」

アルバード「以心伝心？やだ心通じちゃ…お？泣くぞ？腿はやめて泣いちゃう」ナミ

ダメ

エリナ「優しくさすってあげようか」

アルバード「やめろ刺激するな今B I N ☆ K A Nなんだ」

エリナ「情けない声で鳴いてもいいんだよ？」

アルバード「お、攻めたいお年頃か？いつも鳴かせられてる仕返しか？」

エリナ「……!!」ゲシゲシ

アルバード「顔真っ赤にしちゃってかわい…痛い！もう片方の腿が痛い！立てなくなるって！」

エリナ「大丈夫、もし自力で何もできなくなっても私がずうっとそばにいてあげる」

アルバード「安易なヤンデレは流行らないぞ！」

エリナ「元隊長室、柵の上から二列目奥、暗証番号は*****」

アルバード「ナゼエ!？」

エリナ「色々ありますよねえ、巨貧問わず、ツンデレヤンデレクレーデレ、小さい子から大人っぽいのでSMはソフトなものだけでしたね。よくもまあ、集めたものだね。このご時世に」

アルバード「ま、まさか聖典たちは…!!」

エリナ「安心してください、人の部屋のを捨てたり燃やしたりはしません」

アルバード「ホッ…」

エリナ「今日の私は淑女的です。楽に死なせてあげません」

アルバード「ひどいことされる!？」

エリナ「イジメられる気持ち、おしえてあげる」

アーーーーー!!!